

地域連携企画第 2 弾

# 八尾安中新田植田家の文化遺産

2006 年 10 月 14 日

森 隆男

旧植田家住宅現地説明会

李 熙連伊

植田家に伝わった河内木綿

藪田 貫

植田家の人々と学芸

八尾市文化財課

市指定文化財旧植田家住宅整備について



Kansai University Research Center for  
Naniwa-Osaka Cultural Heritage Studies  
Occasional Paper No. 5

---

地域連携企画第2弾

## 八尾安中新田植田家の文化遺産

2006年10月14日



## ごあいさつ

2005年6月、八尾市植松の植田家から土地・家屋、什物などが一括して八尾市に寄贈されました。当家は、江戸時代中期におこなわれた大和川の付け替え工事に伴って開発された安中新田の管理を永い間にわたって運営してきた経緯があります。それだけに、大阪府下に現存する数少ない会所屋敷として、その家屋はきわめて高い資料的価値を有しています。

当家にはまた、古文書や漢籍類のほか美術資料、河内木綿、民具など貴重な資料が所蔵されています。会所という公的な場と日常的な暮らしの場を伝える稀有な存在の植田家を文化遺産として後世に残していかなければなりません。

2006年10月14日に八尾市教育委員会との共催で開催した、地域連携企画第2弾「八尾安中新田植田家の文化遺産」は、貴重な文化遺産である植田家のごく一部を八尾市民の皆さまに知っていただく機会となりました。

今後、八尾市の方がたと協力しながら調査を進め、植田家が貴重な文化遺産であることを、まず八尾市民の皆さまに認識していただけるよう、次いでその成果を還元していく所存です。

2007年7月

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター  
センター長 高橋隆博

地域連携企画第2弾

## 八尾安中新田植田家の文化遺産

### 目次

ごあいさつ	
八尾安中新田と植田家	5
森 隆男 旧植田家住宅現地説明会	7
李 熙連伊 植田家に伝わった河内木綿	14
藪田 貫 植田家の人々と学芸	25
八尾市文化財課 市指定文化財旧植田家住宅整備について	41
編集後記	

\*本号の表紙は、現在の植田家周辺の町並みを水彩画風にアレンジして掲載しました。

\*本文中掲載の写真・図版のうち注記のないものは、八尾市教育委員会所蔵（植田家寄贈）です。

## 八尾安中新田と植田家

### 1. 大和川付替えと安中新田

宝永元（1704）年の大和川付替えは大坂における水利の一大事業として語り継がれていますが、それ以前の大和川は、大和から亀の瀬溪谷を下ってくる本流が、柏原村で南から流れてくる石川と合流し、ここから西北へ折れ、久宝寺川（長瀬川）と玉櫛川（玉串川）に分かれて、各川や池と合流しながら、最後はそれぞれ淀川へと注いでいました。

当時の大和川が流れていた河内平野は、川が運ぶ肥沃な土砂のおかげで、古代から田畑が開かれ、人々が生活を営んでいましたが、反面、常に洪水の被害が多発していました。古くは飛鳥時代の白雉3（651）年の水害から、奈良時代の宝亀3（773）年の大雨による茨田・渋川・志紀の被害、永祿6（1563）年の畿内大洪水などの記録が残されています。また、天文2（1533）年には、植松の堤が切れて渋川神社の社殿がながされたとも伝えられています。

これらの時代にも、大和川の治水を確保し、洪水を防ぐために色々な取り組みが行われましたが、洪水は収まることはありませんでした。

江戸時代になり幾度かにわたる農民たちの直訴によって、元禄16（1703）年10月28日、ようやく幕府は大和川付替えを決定したのです。翌、宝永元（1704）年2月27日から世紀の一大事業と言われる“大和川付替え”が行われ、計画では3年を費やすといわれていた工事が8ヶ月足らずという早さで終わりました。

この付替えで、土地をなくした村は40ヶ村にのぼり、約270haの田畑がなくなりましたが、付替えの翌年の宝永2（1705）年から、久宝寺川や玉櫛川などの旧川筋や新開池、深野池などで新田開発が始まり、付替えから5年後には約1,060町歩（約1,050ha）、34ヶ所の新田が開発されました。幕末には、旧大和川筋の新田開発は53ヶ所までになりました。

本市域においても山本新田をはじめ9ヶ所が新田開発されましたが、その1つが安中新田です。

享保6（1721）年5月の検地帳によると、安中新田は47町17歩あり、その内の約半分の22町9反4畝10歩が、柏原の玉手山にある安福寺の所有となりました。



▲ 付替え後の旧大和川の新田

### 2. 安中新田会所と植田家

植田家が安中新田に入ってきたのは、宝暦12（1762）年であり、安中新田が開発されてから、50年後のことです。

安中新田は、今回の調査で新たに発見された植田家所蔵の正徳元（1711）年に作成された「安中新田分間絵図」によって、約半分が安福寺の所有で、残りは慈願寺や瓜破、老原などの名が記載されており、複数の開発主体によって開発された新田の総称であることが判明しました。

また、絵図には、現在の植田家屋敷の位置に「会所屋敷」と書かれており、植田家が安中新田の（安福寺寺領の）支配人として居住する以前から、同屋敷は新田と代官との連絡或いは地

元民の寄り合いなどが行われていた「会所」として使用されていたことが判りました。

同新田の支配人として植田家で最初に赴いたのは、初代植田林蔵であり、林蔵は、大和国田原本出身の人物で、父は田原本藩主平野権平の内、梶尾勘兵衛であったことが今回の調査で明らかになりました。

### 3. 旧植田家住宅の位置づけ

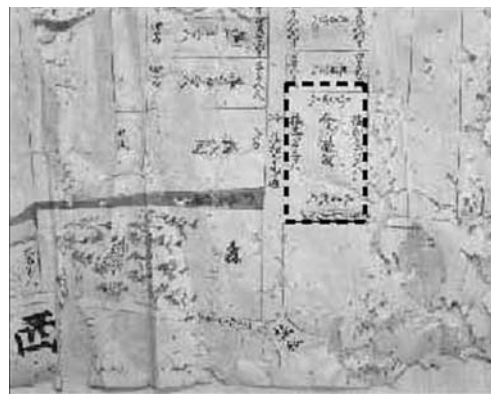
旧植田家住宅は、平成 17 年 10 月に江戸時代の庄屋屋敷として「国登録有形文化財」の申請をし、平成 18 年 3 月に同文化財として国の原簿に登録されました。そして、今回の調査で正徳元（1711）年の「安中新田分間絵図」が発見されたことにより、同住宅が新田会所であったことが判明し、平成 18 年 6 月に市の指定文化財となったものです。

大和川付替えによって開発された新田会所は、中河内地域においても建造物及び敷地ともに国の重要文化財である東大阪市の「鴻池新田会所」が残るのみであり、また、市域では山本新田と柏村新田にも会所はありましたが、いずれも建物は現存しておらず、屋敷地としても確定できない状況にあります。

しかし、安中新田会所は、植田家が代々新田の支配人を勤めていたことから、建物は幾度かの改修が行われているものの、会所屋敷地と建物が現存している貴重な文化遺産であることはいうまでもないことです。

また、同家所蔵の文政 5（1822）年の家相図に描かれている建物の骨格は、現状の正門と裏門が逆となっていますが、土間部分に会所屋敷当時の姿をとどめていると推測され、今後の復元整備に係る解体修理によって明らかになっていくことでしょう。

\*本稿は現地説明会の配付資料（八尾市教育委員会作成）をもとに再編集いたしました。



▲ 「安中新田分間絵図」（植田家蔵）

植田家調査 ▶



◀ 現在の植田家周辺

## 旧植田家住宅現地説明会

森 隆男



皆さんおはようございます。ご紹介いただきました、森でございます。私自身は実は建築が専門ではありませんでして、普段の暮らしから日本の住まいを研究するという民俗建築学という分野で勉強しています。今日は皆さんに内部をご案内しながら、この家でどんな暮らしが行なわれていたかということを感じ覚的に体験していただこうと思います。

植田家の歴史につきましては、八尾市教育委員会の方で作っていただいた資料をご覧くださいと思います。この植田家の建物は明治あるいは江戸時代の終わりの可能性もあるのですが、おそらく明治のごく初めに建てられたものじゃないかと思えます。植田家は、普通の農家あるいは庄屋ではなくて、会所と言いまして、この地域の寄り合いの場所であったり、あるいは役人との連絡をする場所という、一種の役所的な性格の部分はこの住まいの中、建物の中にもっています。そういった公的な部分と、一方でこの地域のいわゆる農家の暮らしというものをしっかりとこの建物の中に残しています。その違いをぜひ皆さんに感覚的につかんでお帰りいただけたら非常にうれしく思います。よろしくお願ひします。

早速ですが、皆さんに、役所としての植田家においでいただいたということで、これからご案内したいと思います。こちらからどうぞお上がり下さい。一段低くなっている部分がおそらく受付であったり、簡単な事務処理を行うところだったはず（【写真1】）[A落床；※ p.13「植田家見取図」参照、以下同様]。



【写真1】落床

さて、この家は先ほど申し上げましたように、公的な空間をしっかりと作っているんですね。それは長屋門から入ってきまして、当時でいいますと侍身分の客があった場合は、そこの土間ではなくて、一段高くなった段がありますね、ここから上がります。これは式台と申しますが、こちらから比較的身分の高い客が招き入れられます [C式台]。それからここに松竹梅の飾りのある欄間がございまして、こういうものでまず丁重に迎えられて、次に進むと控えの間、さらに通過して奥の方に進んでいきます。先ほどの式台から、控えの間を通過してこの部屋、ここでおそらく事務的な仕事が行なわれたんじゃないかと思えます。ですから、ここはどちらかといいますと、ご覧いただいたとおり、事務所的な、オフィスのような部屋となっております（【写真2】）[C座敷2]。



【写真2】座敷2

さてその上でさらに重要なお客さんをもてなすというときにはどのような対応をしたかと申しますと、次はこちらまで移動するわけです。どうぞ一番奥の部屋までお入りください。せっかくですから、最高の客のもてなしを受けたつもりでお座りいただけませんか。先ほどの、どちらかとい



まずと、殺風景な事務所のオフィスのような部屋に比べまして、この部屋は全く様相が変わってまいります。先ほど、この家が公的な空間を非常に大事にしていることはお話いたしました。それはどういうことかといいますと、いわゆる武家住宅の様式というものは室町時代に成立するのですが、武家住宅の一つの考え方として、玄関、出入口から出来る限り遠くの、一番奥の部屋を最高の部屋として整備をするということがあります。ですから、先ほどご案内した式台から一番奥のこの部屋まで招き入れるということで、最高のもてなしをしていることを示しているわけです（【写真3】）[◎座敷1]。その上でこの部屋をご覧いただいたらわかると思いますが、金の襖ですね。違い棚に床の間、それから欄間をご覧ください（【写真4-1】～【写真4-3】）。茶臼に茶碗、茶釜とか、いわゆる数寄って言うんでしょうか、この欄間にはおそらくこの家の当主の考え方や好みが見られていると思います。先ほど高橋先生からご助言いただいたのですが、もしかしたら大坂欄間かも知れません。このように非常に凝った欄間が作ってあります。ここで、最高のもてなしを受けることになります。



【写真3】座敷1



【写真4-1】座敷1の襖



【写真4-2】座敷1の床の間と違い棚



【写真4-3】座敷1の欄間

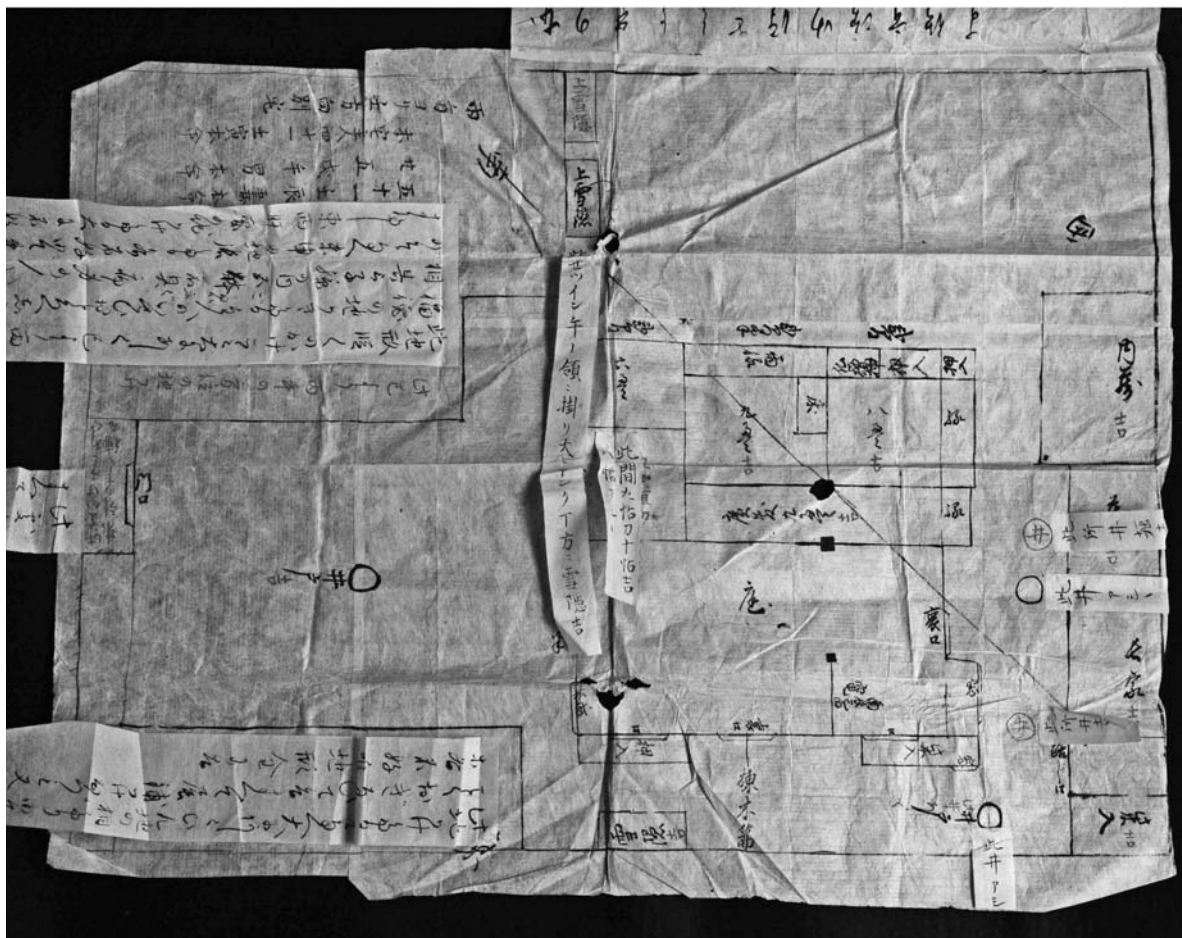
この部屋で最高の席はおわかりでしょうか。床柱を背にした場所が、最高の席ということになっております。おそらくこの家の当主は、客に床柱を背にして座らせて対応するという形を取ったのだと思います。このような当主と客の関係が成立するのは、実はこの部屋だけなんです。他の部屋で客を迎えたときに、客を奥に座らせることがあるんですが、それはちょっと逆なんです。つまり出入口に近いほうに客を座らせまして、対応するのが正式です。正式な客がここに至って初めて、当主と客の位置が逆転して、客が床柱を背にして座るのが、武家社会に起源をもつ作法だと思えます。それがこの家ではしっかりと作り上げられているということがわかります。おそらくそこでごちそうなどを出しながら、立派な庭を觀賞してもらったのでしょう。以上植田家の一つの特徴とし

て、公的な空間というのを非常に大事にし、その機能をきっちと考えて部屋を配置していたことを説明いたしました。

今度は逆にこの家で普通の生活がどのようなであったのかということを経験していただきたいと思ひます。まず、この家の家相図をご覧ください。文政5（1820）年前後の家相図なんです、大坂の心齋橋に住んで家相見をしておりました井上主殿鶴州が作成したものです（【写真5】）。当時比較的有名な家相見でした。この人が、この家の新築および改築にあたって、文政5年は午年なんです、午年に普請に着手すると当主は殺されますよ、妻子は滅ぼされますよ、と警告しているのです。それでどうしたらいいかという、来る未年、つまり文政6年の3月に普請に着手するよう指示したものでございます。この家相図というものは、「暴れん坊将軍」の番組で皆さんもよくご存じの徳川吉宗が、鎖国体制の枠の中で中国の書物を積極的に輸入するんですね。その流れの中で中国の風水関係の書物が日本にたくさん入っ

てまいります。それを勉強した人達がいゆる家相見という、一つの職業を成立させていくんです。ちょうど文政5年というのは、家相見が作った家相図が出てくる比較的早い段階に当たります。それがここにあるということ、しかも、当時大坂で有名な家相見が作ったものがこの植田家に残っていたということで、非常に面白い資料だと思います。それでこの家相図を見ておきますと、皆さんが入ってこられた長屋門が古くからあるように思われるのですが、この家の前の建物では逆の位置にありまして、現在の長屋門側は裏口であったことがわかります。出入口が逆転しているんですね。家相図というのは、間取りの歴史をさぐる上でも非常に貴重な史料になります。それがこの家には数枚残っております。ですからこの家がどのように形を変えてきたかということも、家相図を通じて研究することができるわけです。

そうしましたら、土間の方へ移っていただけますでしょうか。土間がこんなふうに広がっているのですが、中ほどにある格子の建具は結界と申し



【写真5】文政5年前後家相図

まして、土間を表側と裏側にきちっと分ける装置なんです [㊦結界]。客は基本的にはここより奥には入りません。接客の場は結界までで完結をさせていただきます。家族とか、ごく親しい村の人だけが、ここから向こう、つまり日常の生活空間に入ることができます。河内・摂津・大和の農家には結界と呼ばれる表側と裏側を分ける建具がございました。これがはっきりとこの家にも残っております。植田家が、この土間から奥の部分にきちんと農家としての役割・機能をもっていたことが、これから入っていただいたらわかると思いますので、どうぞ奥にお入りください (【写真6】 [㊦玄関ウチニワ]) [㊦玄関ウチニワ]。

さて先ほど、結界を越えたいわゆる裏の日常空間が、摂津・河内・大和の農家として典型的なあり方を示しているというお話を致しました。その一つがこの一段低い板敷きの部屋なんですね。ヒロシキというふうに一般的に呼んでおります。ここが家族あるいは使用人が食事をする部屋です。忙しいときには、上がり框に座って食事をしたんじゃないかと思えます (【写真7】 [㊦勝手ウチニワ]) [㊦勝手ウチニワ]。



【写真6】 玄関側ウチニワ



【写真7】 勝手側ウチニワ

そこには、かまどがございます。これは新しいかまどですが、家相図などを見ますと、かつてはアーチ型をした五穴のかまどがございました。ここでどのような食生活がおこなわれていたのかといいますと、茶粥が主食でございます。茶粥といえますと奈良の茶粥が有名ですが、河内も摂津もやっぱり農家では、主食は茶粥です。冷たいご飯ができたりしますと、その上に茶粥をかけて食べるということもあったみたいですね。そして副食は、たくあんを漬けたコウコ、漬物ですね。それからドブヅケという言葉は地元の方はたぶんお聞きになったことがあると思いますが、ナスとキュウリを糠に漬けたものです。このドブヅケが副食です。それからおかずを作る場合は大根が材料の中心になります。大根の煮物、大根の汁、大根の漬物と、大根をたくさん使っていたということが報告書に出てまいります。

私たちには現在いろんな所から食材がやってまいりますけど、植田家も含めてこの河内ではおそらく、近くでほとんどの食材が手に入ったんですね。例えば、お米はもちろん、野菜は畑でサトイモとかいろんな野菜が手に入ります。それから、動物性のタンパクも、川とか池でフナとかモロコ、カワエビ、タニシにシジミ、こんなものが食材として使われております。果物も、イチジクとか葡萄とか柿とか、結構豊富な果物がこの屋敷のまわりで作られております。僕はちょっと記憶があるんですけどね、タニシなんかは非常に貴重なおかずになったんですね。タニシの味噌和えなんていうのは秋祭りには必ず作ったみたいですね。田植えの後、半夏生という夏至の日から11日目の日には、この地域では必ずタコの酢の物を食べたということが記録に出てまいります。タコは吸盤でピタッとくっつきませんが、苗が田にしっかりと根付くという、一つの俗信でもあったみたいですね。そういう調理で重要な役割を果たしていたのが、そのかまどということになります。

もう一つ皆さんにこの家の特色として私が是非挙げたいのは、いろんな神さまがたくさん祀られているということです。先日1日かけて、どんな神さまがどこから呼んで来られているかということの一つ一つ調べました。例えば、この一段高くなった8畳の部屋、ここではダイドコ [㊦] と呼



【写真 8-1】ダイドコの神棚



【写真 9】ダイドコの縁起棚



【写真 8-2】ダイドコの神棚調査の様子



【写真 10】裏出入口横の小祠

んでおりますが、2つ神棚がございます（【写真 8-1】）。正面にありますのがお伊勢さん、それから春日さんとか多賀さんとかというこの辺の有名な神社から、そして大峰山からも呼んで来ていますね。それから後は滋賀県の竹生島からも呼ばれております。どちらかと言いますと、大峰山とか吉野あたりの神さま仏さまがたくさん祀られているんです。常覚寺という吉野町のお寺の名前も出てまいります。それでなぜだろうかと思っていたのですが、ここでは13歳になると男性は「山上参り」といまして、大峰山参りをするんです。ですから八尾を含む河内という地域では、吉野の大峰山あたりとの行き来が結構盛んにおこなわれていたようです。そういう関係で、奈良の吉野方面の神々がたくさん祀られているんじゃないかと今推測をしているところです。

それから中心となる神棚の右手に、ガラス戸のちょっと小さな神棚がございます（【写真 9】）。あれはいわゆる縁起棚と呼ばれるもので、大黒さんや恵比寿さんが祀られております。他にはこの家では水天宮を祀っています。九州の久留米市と東京に本社がある神さまですが、どちらかから勧請したものでしょう。水天宮は河内では安産の神

としてお祀りされておりました。その神がダイドコに祀られております。それからあそこにはあびこ観音のお札が貼ってあります。これはご飯を食べる場所ですね。それから時間があつたら是非覗いてほしいのですが、裏の出入口の横 [①] に小さな祠がずらっと並んでいます（【写真 10】）。神さまの名前を調べますと、「正一位床下大明神」とかあるいは山の神とかに出てくるんです。正一位なんか大明神というのは、お稲荷さんの一種だと思うのですが、そういう神々がずらっと並んでおまして、裏口を守る役割があつたんじゃないかを思います。日常の暮らしの場を守る裏口の神さまがこの神棚です。

表側でたくさんの神さまが祀られているのがここ、玄関の入口 [①] なんです。信貴山とかお寺を中心とした札が玄関の内側に祀ってあります（【写真 11】）。案外見落とされるのですが、ここには意外と本音の神さまが祀られるんです。例えば、関西で言いますと、紙に「十二月十二日」と書いて逆に貼り付けてある家があります。あれは嘘か本当かわかりませんが、石川五右衛門が釜茹でになったのが12月12日だった、この日付を書いて逆に貼っておくと泥棒除けになるというこ



【写真 11-1】 玄関内側のお札



【写真 11-2】 玄関内側の調査の様子



【写真 12】 玄関上お札が入った箱

とで、家の玄関の内側に本音というのでしょうか、そういう神さまが、あるいは仏さまのお札が貼られます。この家もそういうお札を貼っております。

どうぞ表側におまわりください。この入口の上のところ [㊦] に箱がありますが、この中にいろいろな神社やお寺などからのお札が数十枚入っております（【写真 12】）。これはまさにこの家に悪いものが入ってこないようにということを期待して、祀られている神なんです。ですから長屋門ではなく、母屋の玄関の裏表、あるいは裏口にも集中していろいろなお札が祀られています。これ



【写真 13】 神舎内の様子



【写真 14】 鍾馗像

は植田家がこの家で暮らす家族を守るということに非常に関心があった一つのあらわれであります。それから向こうの奥の方に屋敷神が祀られているんです。この家ではお稲荷さんが祀られております（【写真 13】） [㊦]。おそらく江戸時代の終わりから明治の始めにかけて伏見から勧請したと思われる。それからお稲荷さんのほかに、いろいろな神々が合わせて祀られておりますが、この母屋の妻側のちょっと高いところ [㊦] に、焼き物で作った 30cm くらいの鍾馗像が取り付けられています（【写真 14】）。京都などにお住まいの方は、鍾馗の焼き物が家のちょっと高いところにくっつけてあるのをご覧になったことがあると思いますが、鍾馗というのは、中国の唐の玄宗皇帝の夢の中に出てくる、いわゆる魔除けの神さまです。そ

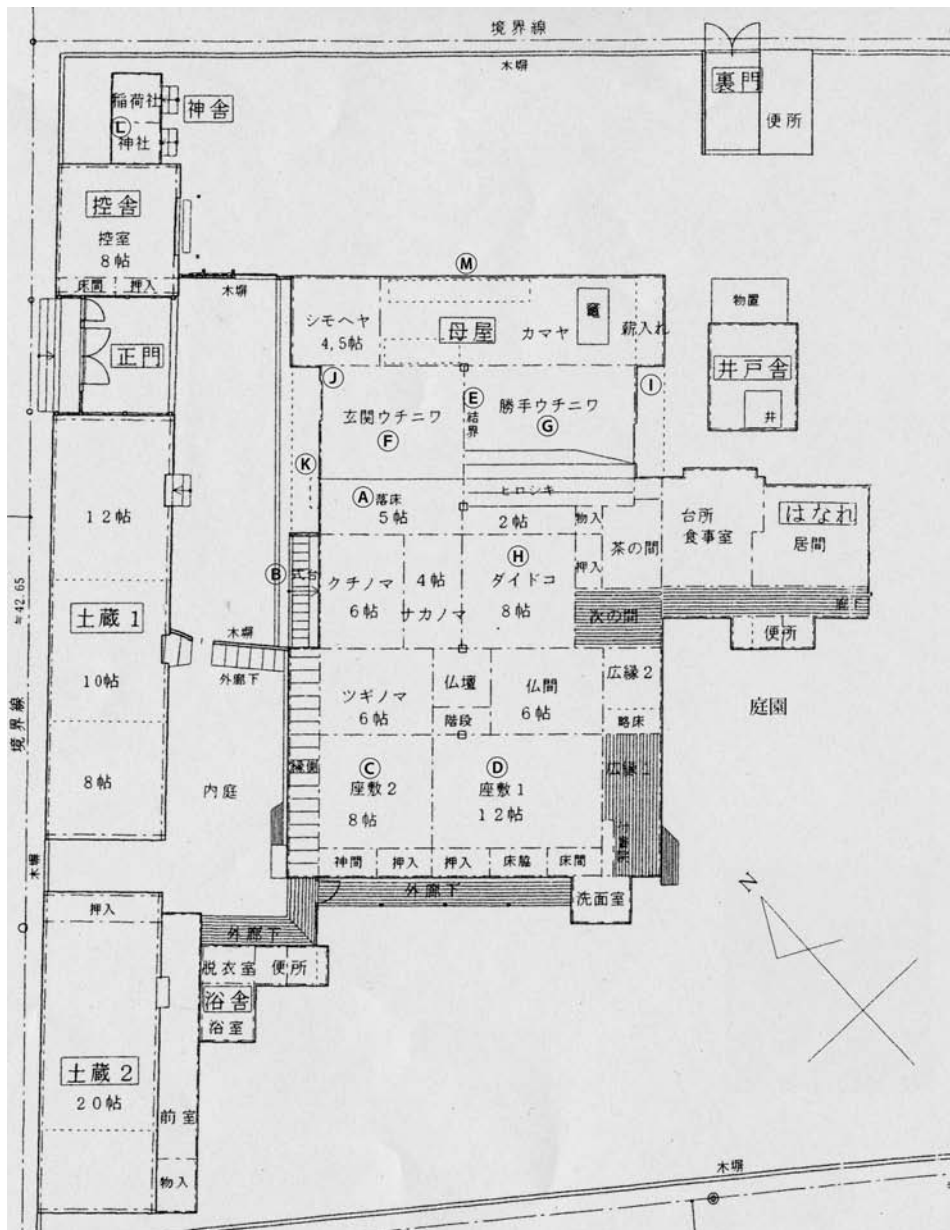
れが日本に入ってきました、町に住む町屋の人たちを中心に信仰が広がってまいります。こんなふうはこの家には必要なあるべきところに、神さまあるいは仏さまが祀られているということから、家族の精神的な守りを大変に大事にした、そういう家だったことがわかります。

先ほどちょっと申し上げたのですが、この家は今年の6月に市の指定文化財になっています。主な理由は、会所という公的な機能をもった建物が、敷地とともに残っているということに価値を認められたからでした。さらにそれに加えて、土間を中心にした、この家で暮らした人たちの昔の暮らしを感覚的に理解できる、そういう家がこの植田家ではないかと思うんです。幸いこの家は、別の場所に台所を新しく作られましたから、かま

どを含めた土間の部分が古い姿のまま残ったんですね。そういうこともありまして、日常的な暮らしの場、そして会所という公的な場、そういうものがこの植田家の中にきちっと空間的に区別をされてうまく残ってきた、その意味で本当に面白い貴重な文化遺産じゃないかと思います。この建物が八尾の地でずっと皆さんの手によって守られていくことをお祈りしたいと思います。ありがとうございました。

**森 隆男 (もり たかお)**

関西大学文学部教授。生活文化遺産研究プロジェクト研究員。専門は文化人類学（民俗学・民族学を含む）および民俗建築学。特に民俗建築には造詣が深く、人びとの生活のありようから日本の住まいの研究を進めている。



【図】 植田家見取図 (部分) (平谷建築事務所提供)

## 植田家に伝わった河内木綿

李 熙連伊



皆さんこんにちは。ただいま過分なご紹介をいただきました、八尾市立歴史民俗資料館の李熙連伊と申します。私は大学時代、この後ご講演されます藪田先生に教わり、本当に素晴らしいご縁がずっと続いておまして、今日こういった形で先生と同じ席でご報告させていただけることを大変うれしく思いつつ、緊張もしております。随分昔に卒論で先生の前で報告して以来なのですごく緊張しているのですが、前座を盛り上げるものがないように頑張るって務めたいと思いますので、どうぞ会場の皆さんも盛り上げてくださいますようお願い申し上げます。

私は大学時代藪田先生のもとで近世史を学び、卒業以来ずっと千塚にございます八尾市立歴史民俗資料館に勤務しております。資料館は開館してもう19年になります。資料館のほうでは皆さんもよく御存知のとおり、毎年綿を栽培しております。私は収穫した綿を使って、綿繰りや糸紡ぎなど、綿を利用した普及活動を主にやっております。そして去年出前授業として、この近くでしたら永畑幼稚園の年長さんたちに綿繰りと糸紡ぎを教えに行ったりしております。普段資料館では、河内木綿をはじめ木綿資料全般を専門に担当しております。そこで今日は、安中の龍華地区の皆さんに、ぜひこの地区に伝わった大変素晴らしい貴重な木綿資料を間近に見ていただこうと思ひまして、このように並べられるだけの資料を持ってまいりました。午前中の植田家の現地報告会を聴かれた方がほとんどだと思うのですが、数年後に資料館

のような建物ができましたときには、このような形で皆さんに見ていただくことは、恐らくできないと思います。展示ケースのガラス越しといった形でご覧いただくことになると思いますので、今日のように直に見れるチャンスは最初で最後だと言っていると思います。ですので、できるだけこの地区に住んでおられる皆さんに見ていただいて、「あ、これ知ってるで」とか「こんなうちでも使ってた」などいろいろと教えていただきたいと思っておりますので、よろしくお祈りします。

さて、植田家は旧安中新田の新田会所の支配人をしていたお宅だというご報告が午前中もあったかと思うのですが、植田家にはたくさんの資料が残っております。現在までまだ5回ぐらいいしか調査に入っておりませんので、今日皆さんにお話しできることは、延べ日数5日間くらいの成果でしかないんです。しかし木綿資料を見た感じでは、安中の新田会所としての公的な資料というよりは、むしろ裕福なお宅に伝わった一般の木綿資料といったような印象があります。ですので、安中新田会所だからというのではなく、この地域の、広く言えば河内の裕福なお宅に伝わっている河内木綿ということで、見ていただけたらいいと思います。

まず会場の真ん中にございますのが、節句幟です。皆さん、幟といいますと5月の鯉のぼり、吹流しがあって、鯉が泳いでいる姿を想像されるかと思ひます。あの鯉のぼりというのは実は新しく、江戸時代の節句幟はこういう縦長の絵幟なんです。こちらのお宅には、3本節句幟がありました。

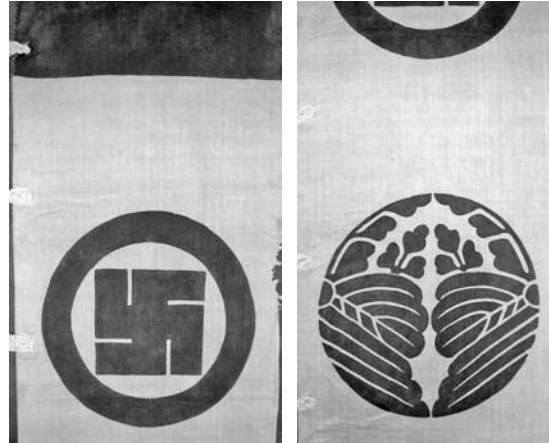
1本目の節句幟から説明したいと思います(【写真1】(1)～(6))。節句幟の一般的な部分名称から申しますと、上の方に黒い2本の線がありますが、これを「二引き」と申しまして、上の太いほうがお父さん、下の細いほうがお母さんを表しているそうです。次に家紋が2つございますが、上のほうの家紋はそこのお家の家紋です。植田さんのところは丸に卍紋ですので、植田家に伝わった丸に卍紋が描かれています。それで下のほうの家紋は贈り主のお家の家紋だそうです。ですから、例えばお母さんの里方だったらそちらの紋になりますでしょうし、親戚に子供さんができたからと



【写真1】(1) 黄石公



【写真1】(2) 張良



【写真1】(3) 家紋 (左) 植田家 (右) 贈り主



【写真1】(4)  
「森周仙」署名

【写真1】(1)～(4)

黄石公が『三略』を張良に授ける図  
(幅 61.5cm × 長さ 757.5cm ; 部分)

いって作ってくださったら、作ってくださった方の家の紋になります。それと、あと周辺にびらびらとなっているのは、「乳」といいます。このちょっと出っ張っているところから「乳」というのだそうです。

それでいよいよ本体といえますか、絵の部分について説明いたします。ここは子供に健やかに力強く賢く育て欲しいという、親の思いを託して描いた部分だそうです。皆さんはこの絵は何の絵だと思われますか？馬に乗った老人、橋、男性、川に流れている靴が描かれています。節句幟にどのような画題が描いてあるのかを見つけるのはすごく難しく、いろいろな方をお願いして教えていただきました。現在京都府立山城郷土資料館におられます学芸員の伊藤太さんが、こういった幟の事例をたくさん見ていらっしゃって詳しいんです。その方や、大阪歴史博物館に大坂画壇、大



坂で活躍した絵師たちのことを専門に研究しておられる岩佐伸一さんとおっしゃる学芸員がいらっしゃいます。こういった方々にお聞きしましたところ、やっとわかりました。これは実は中国のお話でして、画題は「黄石公が『三略』を張良に授ける図」といいます。この老人は黄石公といいます。この老人が手に持っているこの巻物が『三略』といって、上中下巻と3本ある兵法書です。戦の仕方などの秘伝を書いてあります。この『三略』というものをこの男性、すなわち張良に授けているところの図だそうです。これにはいろいろ逸話がございます。この張良が散歩していたら、あるとき橋の上で老人に出会うんだそうです。その老人が自分の靴をわざとポーンと川の中に投げて、「おい、そこの君、取ってくれ」みたいなことを言って、通りかかった張良が取ってあげるんですね。そしたら今度は「わしの足に履かせてくれ」と老人が言って、張良はご老人は大事にしなければという思いで渋々履かせて差し上げるそうです。それでこの老人が張良に「今度もう1度この橋の上で会おう」という約束をします。しかし張良は、2度約束の時間に遅刻してきたそうです。このことに対して、この老人、すなわち黄石公は怒って、「3度目は間に合わなかったらあかんぞ」と言うので、張良は前の晩から来て待っていたそうです。それで何度でも靴を拾って履かせてあげるという張良の忍耐強さが認められて、黄石公に、「『三略』という兵法書を授けてあげよう」と言ってもらったときの図だそうです。このお話は、中国の史記が画題のベースになっております。

ここに森周仙筆というサインが入っていますが、この名前から何かわからないかなあと思ひ、岩佐さんにおたずねしたところいろいろと調べて下さいました。その結果、江戸時代にもものすごく人気のあった森派という大坂画壇の一派があるんですが、その森派の中に周仙という名前は見当たらなかったそうです。絵自体はどちらかというと狩野派の画風なんだそうです。しかも狩野派といひましても、奥絵師、つまり大名屋敷などの屏風とかふすま絵を描くような狩野派ではなく、町狩野と申しまして、庶民が好む題材を著名な画家さん風にまねて描く町絵師、この場合狩野派のタッチをまねた町絵師が描いたのではないかと岩

佐さんはおっしゃっていました。名前が「森」であるのは、おそらく大坂では森派のほうがネームバリューがあって、「森何某」というふうにしておいたほうがいいと考えたのではないかというのが、今のところの結論なんです。ただわからないことがたくさんありますのでこれからもまた調べて、わかりましたら皆さんにご報告させていただきますと思います。

2本目の幟は、すごく幅が広くて長さも長いんです（【写真2】(1)～(6)）。皆さん、これは何が描かれているのかおわかりになると思いますよ。複数の頭を持つ龍のような生き物が美味しそうに、クピクピクピと何か飲んでます。日本の古いお話のなかに、龍のような生き物を酒に酔わせて何とかかんとかというの、ヤマタノオロチですよね。ですからこの人はヤマタノオロチを退治したスサノオです。娘さんが夜な夜な食べられて困っているところにヒーロー登場ということになるんですね。このヤマタノオロチというのは8つの頭があるというよりは、巨大な霊力を持つという意味だそうです。それでこの幟も先ほどの幟と同じで、上の「二引き」の太いほうがお父さん、



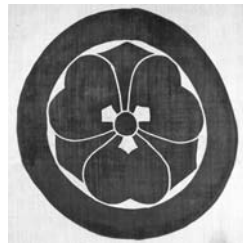
【写真2】(1) スサノオとヤマタノオロチ



【写真2】(2) ヤマタノオロチ ※囲み部分は振り止め



【写真2】(3) 二引き



【写真2】(4) 家紋(丸に剣片喰)



【写真2】(5) 家紋(丸に木瓜) 【写真2】(6) 「重信」署名



【写真2】(1)～(6)

「スサノオがヤマタノオロチを退治する図」  
(幅 96.0 cm×長さ 945.0 cm；部分)

細いほうがお母さん、そして、下の家紋が若干不思議なんです、植田さんのところの丸に卍紋ではなく、丸に剣片喰紋なんです。贈り主は丸に木瓜紋、どういう由来で伝わったのかはちょっとわかりません。それから「乳」と、左下隅に三角形

の赤い部分があります。これは「振り止め」といいます。幟を立てますとパタパタとはためきまして、絵がきれいに見えないので、この下に「さるぼぼ様」といって、中に綿が入っているお猿さんの人形や、三角形の綿入れを3つくらい重ねて吊り下げ、パタパタとはためかないようにするところです。これはしっかり「振り止め」が残っていますね。こういった赤色を使うのはやはり疱瘡除けのためでしょうか。赤色は民俗学的に魔除けなどの意味があります。昔、子供さんのお風呂上りに使っていた湯上り、今で言うバスタオルは、コーナーが赤かったりします。

この幟は赤や黄や群青など顔料がすごく鮮やかなんです。すごく大きいです。これが本当にかかっていたら、さぞや、「おおーっ」という感じだったんでしょうが、皆さんの中でこれがかかっていたのを覚えておられる方はいらっしゃいませんか。さすがにそこまではいらっしゃらないでしょうか。

さてこの幟の筆者のサインですが、「重信」と書かれております。この「重信」というのは下の名前だけです。江戸で大変有名な柳川重信という絵師さんがいらっしゃって、その人を筆頭に「…重信」というのは絵描きさんの中でたくさんある名前だそうです。重信と名乗る著名な絵師が多いということなんです。

画風に関していうと、これもやっぱり狩野派を意識した人が描いていて、しかも厳格な狩野派ではなくて、庶民的にデフォルメして描いているというのが、伊藤さんや岩佐さんの感想でした。

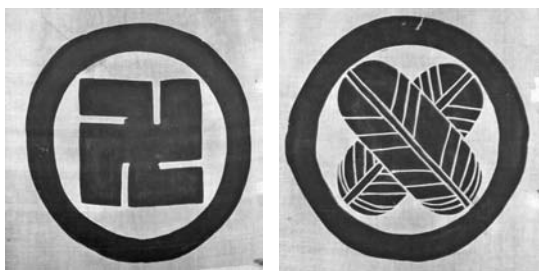
それでは3本目は何のお話でしょうか(【写真3】(1)～(4))。2本目をご覧になって3本目をご覧になると、顔料が落ち着いている感じがしませんか。ですので2本目の幟よりは、こちらの幟のほうが時代は古いのではないかと考えています。

こちらの幟も2本目と同じように「重信」と書かれています。しかし重信の下の落款が2本目の印とまた違うんです。この印を手がかりに調べてみたのですが、いま一つよくわからなくて、今日に間に合いませんでした。

次に家紋ですが、丸に卍紋ですね。まぎれもなく植田さんのところに贈られたものです。そして



【写真3】(1) 趙雲と阿斗



【写真3】(2) 家紋 (左) 植田家 (右) 贈り主

【写真3】(3)  
二引きの鶴



【写真3】(1)～(3)「趙雲が阿斗を助ける図」  
(幅 93.5cm × 長さ 932.0cm ; 部分)

贈り主の紋が丸に違い鷹の羽紋です。コーナーには赤い振り止めがついております。この幟に描かれている人物も見るからに日本人じゃないですよ。すごい鉄剣を振りかざしてごつい鎧を着ていますが、この画題は三国志からです。三国志について私は詳しくないので簡単に済ませたいと思うのですが、この人が抱いている赤ちゃんがポイントになるんです。この赤ちゃんがのちのち誰になるかという、蜀の国の第二代目の皇帝になる人です。幼名は阿斗といひます。この赤ちゃんが武将に助けられているシーンが描かれていました、この武将は趙雲です。この趙雲は三国志ファンの中で最も人気のある、最強のスーパーヒーローといわれている人物だそうです。この阿斗のお父さんが劉備という蜀の国の初代皇帝なんです。劉備が魏の曹操に攻められたときに、何を思ったか阿斗ちゃんを置き去りにしてしまうんです。この置き去りにされた阿斗ちゃんをスーパーヒーローの趙雲が救い出すという大変勇ましいお話を描いております。最後に上の二引きのところに鶴が描かれています。面白いですね。とても手が込んでいます。

このように幟には三国志に題材をとっているものが数多く見られます。三国志は実際の三国の正しい歴史のお話ですが、それに対しまして『三国志演義』というものもあります。これは実際の三国志には登場しない、いろいろなスーパーヒーローを書き足して、もうそれは壮大なストーリーで、江戸時代の日本人々もとても夢中になったそうです。読み本から刷り物まで爆発的に広がるそうです。後ほどご講演されます藪田先生のお話のなかでも、もしかしたらそういったところに触れていただけるかもしれませんが、江戸時代の日本の庶民が、簡単な本とか刷り物などで、三国志のお話を見聞きして知り、自分の町にいる町絵師さんに、子供のために節句幟を作ってくれるようお願いして、作られた幟だと思います。ですから江戸時代の人は本当に教養があったんだなあと思いました。

植田家で調査をしていて、3本の幟の中で私がわかったのは、ヤマタノオロチだけでした。どうやら中国の人物のようなので、三国志か何かかと

思ったのですが、三国志のどの部分にあたるのかまでは、全然見当が付きませんでした。それで先ほど申し上げたお2人の学芸員に助けられ、何とかこうしてご報告することができました。当時の人たちは基本的な教養といいますか、そういう素地があって今日ご紹介したような幟を描いてもらったということと、そういった庶民のニーズに応じて描いてくれるような町絵師が町にいたということです。もちろんこういった幟を頼むことは、やはり大変お金の要ることですので、裕福なお宅だからこそ現在まで伝わったということは間違いありません。

さてこれらの幟以外にも河内で節句幟があったいくつかの事例をお話しさせていただきます。現在私が調査で確認しておりますのは、資料館に3本と、この植田さんのところの3本、あともう1本、久宝寺のほうに個人のお宅で持っておられる節句幟があります。この幟には千成瓢箪が描かれていて豊臣秀吉であることは間違いないのですが、他に何人かの武将が描かれているのです。それが誰か特定できていませんで、真田幸村か、加藤清正なのか、大阪城天守閣の学芸員の宮本裕次

さんにお聞きしましたら、真田幸村か加藤清正、片桐勝元といったところだそうです。あとは、お隣の東大阪市のほうに2点ほど節句幟があることが確認されています。やはりこれだけ大きな物ですので、うちの資料館やこちらにできる資料館で展示するとなるとどう展示しようかなあって思いますよね。全部見ていただいてこそこの節句幟です。お父さんやお母さんの子供に対する想いが幟に詰まっています。どこか折り曲げてとか、端折ってとかすると、とてももったいないと思いますので、ほかの博物館でもなかなか展示する機会がないんだと思います。

次は江戸時代の河内に節句幟があったことについてお話しさせていただきます。資料的なお話になるのですが、『河内名所図会』から「八尾市」の様子をとりました（【図版1】）。ご本尊がお地蔵さんで有名な常光寺の地蔵会の縁日の賑わいの様子を描いています。この絵の中に実は節句幟が描かれています。縦ではなく横にして、大胆に使っています。地蔵さんの縁日には門前にいろいろなお店が並ぶのですが、この雑貨商の底の代わりに使っているのは、これは幟ですね。「こんな使い



【図版1】八尾市の様子（『河内名所図会』巻四所収 関西大学図書館蔵）



【写真4】家紋名入型染油単(大)  
(幅 208.8cm × 長さ 220.5cm)



【写真5】家紋入型染油単(小)  
(高さ 32.7cm × 幅 63.5cm × 奥行 38.5cm)

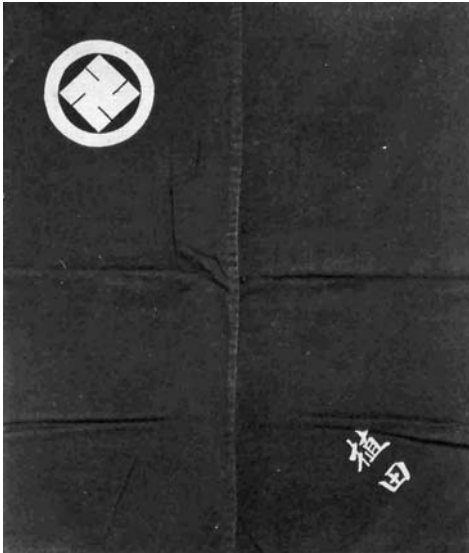
方もすんねんなあ、面白いなあ」と思いました。

それであともう1点は『八尾市史』資料編に収められております「萱村家文書」の中の、天保7(1836)年申年11月に出された「当申凶作米穀高値二付儉約仕方帳」に書かれている一節なのですが、「一、五月五日 幟始祝儀取遣不致、并町内懇意たり共相招候義無用」とあります。要するに、幟始で幟を作ったり、ご近所みんな呼んでわいわいドンチャン騒ぎをしてはいけませんというようなことを言っているのです。ということは、逆に考えれば、この時期はこのように取り締まらなければならないほど、こういった幟が盛んに作られていて、おじいちゃん、おばあちゃん、叔父さん、伯母さんなどが幟を贈ったりしていたんだということが読み取れるかと思えます。ですから、本来は、このような節句幟が残っていていいはずなのですが、現在のところ、先ほど申し上げたように、ほんの数点しか確認しておりません。

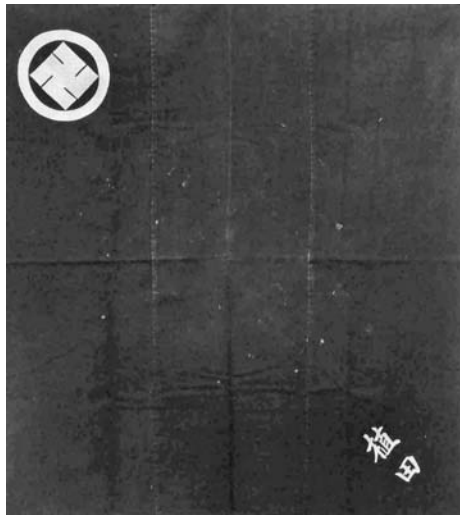
次に植田家の生活がうかがえるような木綿のお話をしたいと思います。これは何かおわかりにな

りますか。油単ですね。大きい荷物にかけるカバーです。丸に卍紋も描かれています(【写真4】)。この小さいものも油単です。ここに穴があいておりますのは、天秤棒を通して担いでいたからです(【写真5】)。皆さん納得していただけて嬉しいです。やりがいがあります。若い人は油単を知りません。今日、なにわ・大阪文化遺産学研究センターの皆さんと一緒に展示しながら「油単初めて見ました」などと言っていました。油単というのはもともと一重の布とか紙などに油を引いて埃や水気をはじくようにしたところから、油単と呼ばれるようになりました。調度品などにかけて用います。後々このように家紋や文様を入れるようになります。植田さんのところには他にもあと何点か油単が伝わっております。大きいのは1点だけで、小さいタイプのもはあと4、5点ありましたので、多分セットにして使っておられたんだと思います。この小さいタイプの油単は、後ろの中央で紐で結ぶようになっています。大きい油単はガバッと荷物にかけて両サイドについている紐で軽く結ぶという形になります。皆さんお気づきでしょうか。小さい油単に描かれた卍と大きい油単に描かれた卍が逆なんです。これは表紋と裏紋という使い分けなのかどうなのか現在のところわからないんです。それからもう1つ、この染物屋さん、おっちょこちょいなのかどうかわかりませんが、見てください。「上田」と書かれているんです。名前が間違っただけ納められているんですよ。これ代金払われたんでしょうかね。許されたんでしょうか。河内の人やから、「うん、かまへんかまへん、もう読めたら一緒やあ」って言い合ったんか、えらいお怒りになったんか、それはわかりません。確かに植田さんのところは「植田」なんです。ほかに風呂敷とかにも出てくるのも全部、「植田」なんですけれども、なぜかこれだけ「上田」になっているんです。

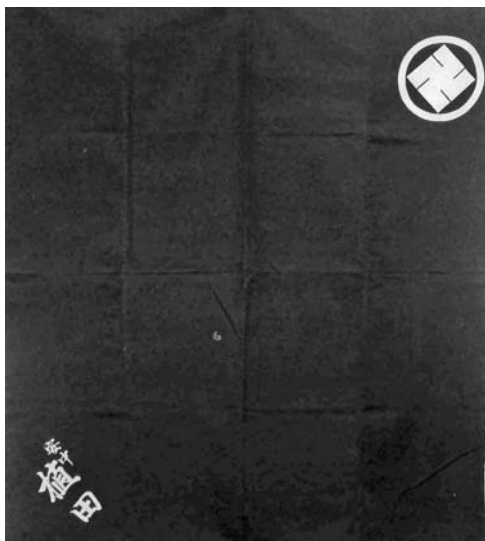
この風呂敷は1幅で展示しておりますが、実際の大きさはこれを2枚縫い合わせたものです(【写真6】)。このような形になります。対角線上に、丸に卍紋の家紋が入って、「植田」と書いてございます。これは2幅ですね。こちらにかけているのが3幅です(【写真7】)。そしてこれが4幅で



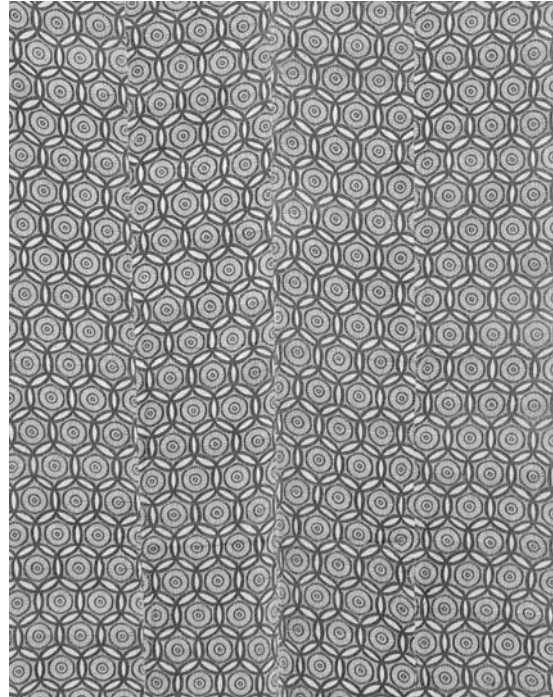
【写真6】家紋名入型染風呂敷（2幅）  
（幅 64.5 cm × 長さ 75.5cm）



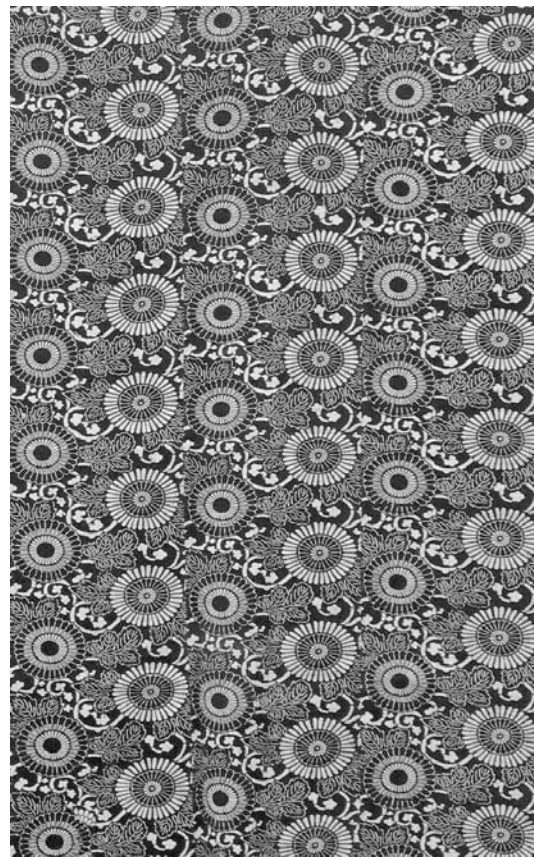
【写真7】家紋名入型染風呂敷（3幅）  
（幅 100.1 cm × 長さ 106.4cm）



【写真8】家紋名入型染風呂敷（4幅）  
（幅 126.0cm × 長さ 144.5cm）



【写真9】菊花七宝繋ぎ文型染布団地  
（幅 130.5cm × 長さ 162.7cm）



【写真10】陰陽菊花唐草文型染布団地  
（幅 94.3cm × 長さ 156.5cm）

す（【写真8】）。【写真8】は安中新田と書いていますので、おそらく別のときにあつらえられたのだと思います。私がこれらの風呂敷をなぜ並べたかと申しますと、婚礼用の風呂敷のセットとして、4幅、3幅、2幅で作るのが一揃え。そこまで大仰にしない場合は、3幅、2幅で作るそうです。ですから今回はこういった家紋入りの風呂敷を各々1点ずつしか持ってきておりませんが、あと数点それぞれセットになるであろうと思われるものがありました。

それで今度はこちらなんです、1幅にしていますけれども型染めの布団地です（【写真9】）。それでは高橋先生が大好きな菊花七宝繫ぎを広げてみたいと思います。1幅で展示していても「ああ、綺麗ねえ」と思われるかと思うんですが、4幅になりますとさらに豪華な感じがしますよね。これは多分婚礼のために調えられたものだと思います。と申しますのは、これは型染めという技法で、元々白い木綿の布の上に型紙を置いて、糊を置き、その型紙を順繰りにずっと送って行って、どこで型紙を継いだかわからないように上手に糊置きをし、染めるときも糊がブチュブチュとお互いつかないように上手に染めて4幅に縫ったものです。大変手間がかかっております。ですからこういった婚礼用のお布団地には、菊花七宝繫ぎですとか、菊花唐草がよく描かれます。あそこの横にありますけれども、菊のお花と唐草です。菊も向かって左側が陰、右側が陽になっています。陰陽菊花唐草と申します。菊は中国で大変めでたいお花だとされています。この菊と菊のあいだを埋めるように伸びている唐草は、「伸びる」というところから永遠とか繁栄を表しています。ですから必ず菊と抱き合わせのように、唐草が入っているんですね。また資料館で展示資料を見ていただいたらおわかりいただけると思うのですが、菊と唐草あるいは牡丹と唐草の組み合わせだったりします（【写真10】）。

ここまで、河内の裕福なお宅に伝わった木綿資料ということでご説明してきました。私は、植田さんのところには、今日お話しした4幅の布団地がたくさん残っているのかなあと思っていたので

すが、ちゃんと布団地として残っているのはこの2点とあと数点ある程度で、大量にドカット残っているというわけではありませんでした。このようにお布団地のままで残されているものもありませんが、おそらくバラバラにほどこいていろいろなものに作り直して使っておられたんだと思います。やはりそれだけ昔は布が大事なものだということがよくわかりますね。

最後に消防法被と消防羽織をまとめてご説明させていただきますと思います。明治11（1878）年に消防規則というのが制定されます（【史料1】）。その中に「消防人足ハ一組四十名トス」とあって、それぞれの役割分担や人数が書いてあるのですが、その中で「小頭二名」とあります。植田家に残されている木綿資料を見てみると、緑色の羽織の背中のところ「小頭」と書いてあるんですね。小頭の羽織です（【写真11】）。これは多分ヒラの消防士さんと色を区別して、現場でわかりやすくするためだと思います。指揮をとる人間がどこにいるのかわからなかったらいけないので、色を変えているのです。これは藍染めしたあとに上から黄色をかけています。そうすると緑色になります。絵の具と一緒にです。青色と黄色が混ざってこの緑色になります。羽織に書かれている小頭というのは、おそらく「消防規則」の中の「小頭二名」の小頭を指すものだと思います。

#### 【史料1】 消防規則

（明治11（1878）年2月23日制定・3月20日施行）

（前略）

#### 第四条 消防人足ハ一組四十名トス

内

火掛 三十二名 訳ケ 頭取一名 人足廿九名  
小頭二名

ポンプ組 八名

#### 第五条 消防器械左ノ如シ

纏一本 梯子 一挺

高張一張 標旗 一流

鎖鍵付麻綱一本 鳶口 七本

刺扱二挺 頭取 手提灯三張  
小頭

櫓二挺 大鋸一挺

斧二挺

ポンプ一挺

但、ポンプ無之小区ハ龍吐水二挺トス

水汲ミ桶十個

但、張策ヲ以テ最良トス（以下略）

（山中永之佑編『堺県法令集3』羽曳野市 1994年 所収）



【写真 11】(1) 消防羽織 (小頭) (前身ごろ)



【写真 11】(2) 消防羽織 (小頭) (後身ごろ)



【写真 12】「渋川郡安中新田」の幟

それで【写真 12】の幟ですが、「渋川郡安中新田」と書いています。この幟は何に使った幟なのかよくわからないのですが、これら消防法被などの一群の中から出てきているので、何か消防関係のものではないかと考えています。「消防規則」を見たところ、消防器械、つまり機材として、梯子や纏などいろいろ書いていますが、その中に旗が出てきます。これは消火のときにバツと旗を掲げていって、安中新田から応援に来ましたみたいな感じで立てたのかも知れませんが、よくわかりません。



【写真 13】鷹口

他に「鷹口七本」と書いていますよね。鷹口を備えなければならないといっているのですが、これもちゃんと残っているのです（【写真 13】）。この部分が鷹のくちばしの形に似ているところから鷹口というらしいのですが、これを建物に引っ掛けて壊していきます。これが鷹口7本のうちの1本なんだろうかと思いつながら、これもまだよくわかっておりません。

それでヒラの人の消防法被は、こちらですよ（【写真 14】）。背の部分に丸に「消」と書いてます。表には「安中」と書いています。この消防法被は資料館がある千塚にも伝わっています。あと萱振のほうにも消防法被があるのが確認できています。このヒラの消防法被と先ほどの小頭の消防法被、同じように裾に2本線が入っていますよね。これは消火に必要な水を表わしています。これと同じものがもう1点伝わっています。

最後に、今日の皆さんはいろいろとよくご存知なので助けていただきたいと思うのですが、1点どうしてもわからないものがあります（【写真 15】）。これは何だと思われますか。どうやら文字をデザイン化した紋のようなのですが、皆さんは何とお読みになりますか。これを消防法被などの仲間に入れていいのかわからないので





【写真 14】(1) 消防法被 (ヒラの人が着た分) (前身ごろ)



【写真 15】(1) 文字紋入型染法被 (前身ごろ)



【写真 14】(2) 消防法被 (ヒラの人が着た分) (後身ごろ)



【写真 15】(2) 文字紋入型染法被 (後身ごろ)

す。ただ共通点はこの裾模様の波が、幟の波とお揃いではないかとも思うんです。でも波しぶきは、幟の裾に書くことが多いのかなあとも思いますし、現に今日入り口のほうにはためいていた関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターの幟をご覧になられましたか。あれも波しぶきなんです。それで「なんで波しぶきが描かれたのかちょっとセンターで研究してよ」って、さっきテーマを投げかけておきましたので、きっと彼らは答えをくれるものだと思って待っております。そういうことでこれはちょっと不明なんです。おそらくこちらはどちらかというと、婚礼用の布団地や家紋入りの風呂敷、油単といったプライベートな場面で使われたものに対して、もっとオフィシャルな場面、お仕事に着たユニフォーム的なものなのではないかという感じがしています。安中新田会所でのお仕事か何かで使われたものではないでしょうか。消防法被などが伝わっているのは、多分植田さんのところが、この安中新田の中心として集まるようなところであったためだと思うのですが、これがよくわからないんですね。ですので皆さん、よく目に焼き付けて帰っていただいて、「あ

の字ちゃうん!？」とか何かお気づきになられましたら是非資料館までご一報ください。

最初に申しましたように、まだ本当に第1次調査的なものです。どういったものがあるのか、全部1点1点に番号を付けまして、写真撮影し、寸法を測ってといった作業をしている中で出て来た成果をご報告させていただきました。まだまだ未完成な報告で申し訳ないのですが、いろいろな方に助けていただきながら、また今回ヒントをたくさんいただきましたので、この木綿たちが一体どういうふう伝わったのか、どういう役割を今まで担ってきたのかというようなことを、私が少しでも解明して、会場の皆さんに、八尾の皆さんに、河内の皆さんに、還元できるようになればいいなと思っております。

**李 熙連伊 (い ひよんい)**

八尾市立歴史民俗資料館学芸員。河内木綿をはじめとする木綿資料全般を対象に研究を進めている。また、資料館で綿を栽培したり、資料館が開催する綿織りや糸紡ぎなどの体験学習会を通じて、河内木綿の普及にも尽力している。

## 植田家の人々と学芸

藪田 貫



### はじめに

本日、一緒に講演します李熙連伊さんは、以前勤めていた大学の教え子です。それがこのように一緒にのところで話すというのは、教師としては冥利につきるようなところがあります。以前、しばらくの間、八尾の西山本に住んでおり、彼女の職場が近かったもんですから、私共の息子2人とよく歴史民俗資料館に遊びに行きました。彼らは熙連伊さんと、姓を呼ばないで名前ばかり呼んでいましたので、私も普段から熙連伊、熙連伊と、呼び捨てにさせていただいております。そういう間柄が持てるのは個人的には大変幸せなことだと思うんですが、彼女と二人並んで喋れるということで喜んでおります。

お手元に机がないのに、私の方はレジユメの数が多くて申し訳ない次第です。何枚か地図を含めて資料がありますので、適宜、見ていただいたら結構でございます。

さて、岸本課長からご紹介がありましたように、私もいくつかの市史の編纂委員を勤めており、その関係で旧家にお邪魔する機会が多いのですが、入れていただいても、玄関かせめて入っても座敷のところまで、ご主人や奥様から話を聞く程度で、トイレまで入っていくとか、蔵の中まで入るっていう機会はほとんどないんですね。ところが今回、こういう形で植田さんから丸ごと家屋を提供していただき、どこへ入ってもいい、何を見てもよいというようにしていただいたのは、ちょっとでき

ない経験です。そういう意味で私自身もこの機会に、少し勉強させていただきたいなと思っております。

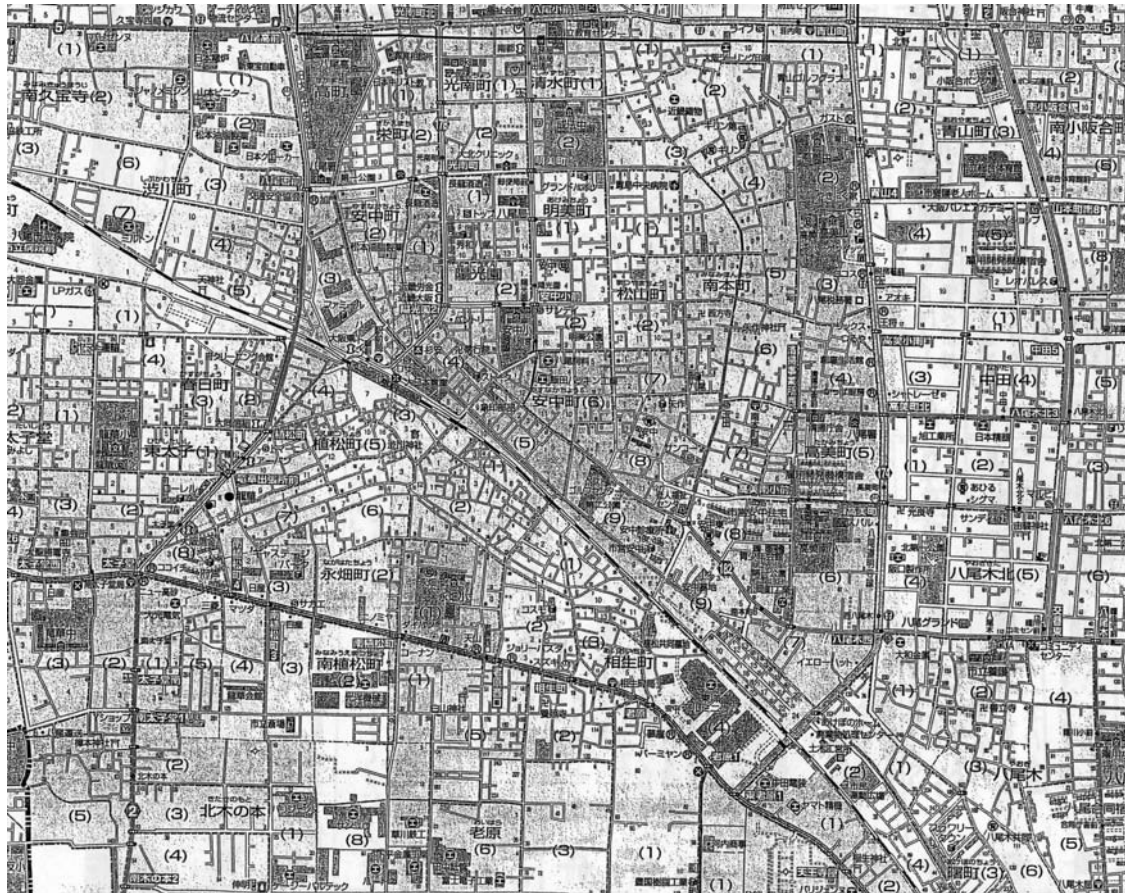
みなさんには午前中、建物を見ていただきましたが、かなり大きなものですよね。それから熙連伊さんの話は、身体にまとうもの、織物の話で、これも目で見てわかるものですね。それに対し私の話は、どちらかと言えば植田家の人々の「頭の中」をですね、ちょっと覗いてみようかと思うんですね。そういう意味で、建物や体に身につけるものとは違って外から見てたらわからないが、ひよっとしたら、この植田家に住んだ人たちの頭の中をのぞけるかもしれないというものです。

例えばいまNHKテレビで「芋たこなんきん」やっておりますけども、あれを毎日見てる人と見てない人では「頭の中」が違うんですね。私は毎日、見えます。「ちゅらさん」も毎日、見ていました。それが私の「頭の中」なんですね。そういう「頭の中」を覗くチャンスというものが、ひよっとしたらあるのではないかということで、後半には、そういう話をしてみようと思っております。

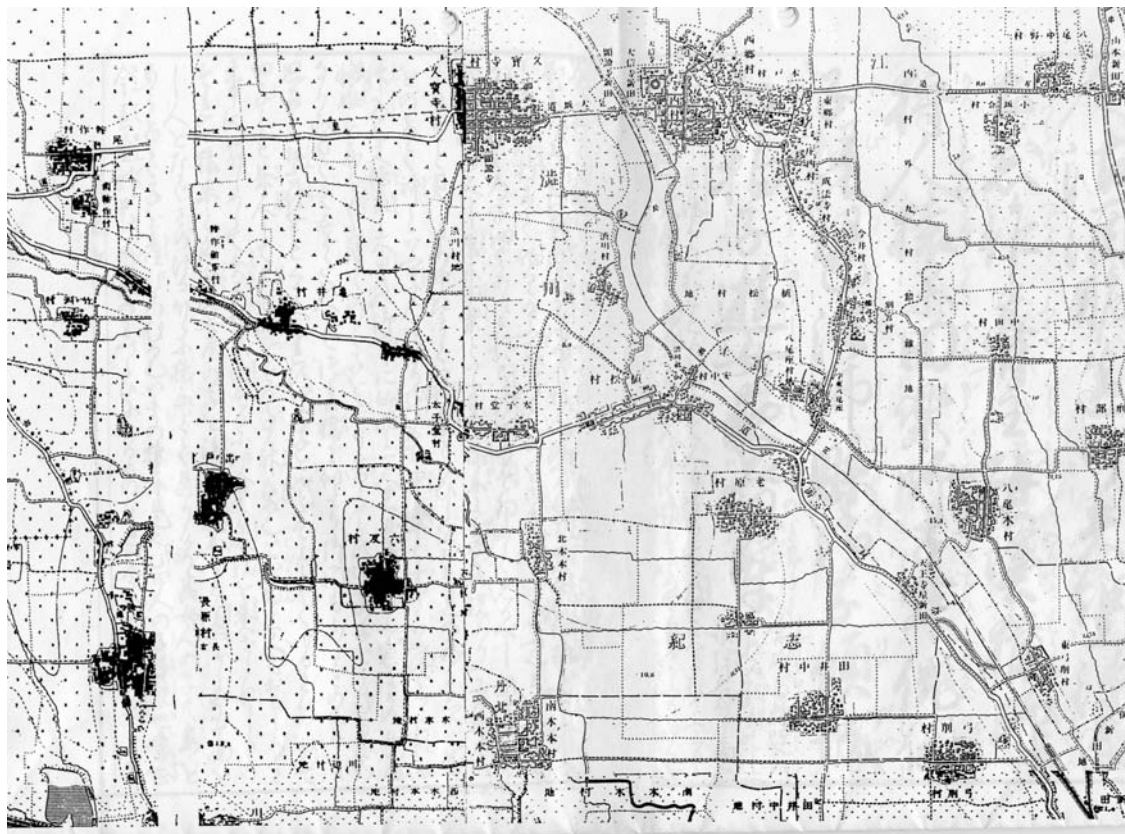
「学芸」という堅い題がついておりますけども、450坪のお家の中で、植田家の人々はほぼ240年間近く、お住みになってきたわけですね。「塵も積もれば山となる」と申しますけれども、その間に、この屋敷の中にはたくさんの塵が積もっております。この間、学生諸君が夏休みの暑い盛りに、5日間ほど連続して植田家文書の整理と調査をしてくれましたが、その連日、屋外でマスクして塵はたきをやってくれました。まさに古文書に塵が積もってるんですね。それを読む前に、まず塵を落とさなきゃならない。こうしてきれいになった古文書の中から、この家の人たちの「頭の中」を覗いてみたいということですが、それも中途半端な話になるかと思えます。まだ去年から始まったばかりの調査・研究ですので、追々、修正させていただきたいと思えます。ご了解ください。

### 1. 安中新田と植田家

最初は植田家住宅のある安中新田の話を行います。そのために地図を入れてあるかと思えますが、植松の地区の方々に、現在の地図（【図版1】）



【図版1】現在の安中周辺



【図版2】明治前期ごろの安中周辺（清水靖夫編『明治前期・昭和前期大阪都市地図』柏書房 1995年 所収）

を見ていただいても、どこが新田なのかわかりません。ところが、【図版2】を見ていただくと、安中新田というのがいかに細長い変わった場所であるかということが一目瞭然なんです。

植松とか、あるいは八尾の寺内とか、老原とか、そういう所は、江戸時代よりも少し古く、室町時代ぐらいにはおそらく集落ができていたと思われる。熙連伊さんのご主人に小谷利明さんという学芸員の方がおられますけれども、小谷さんは、南北朝から戦国期の専門家で、その論文などを読ませていただきますと、旧大和川の河川敷は、よく合戦の舞台になったという話が出てまいります。田畑でやりますと作物が荒れてしまいますからね。ですから河川敷でやるわけですね。昔の川はよく氾濫し、その分、河川敷が広いわけですから、そこで合戦をしたというのです。それが長い間、河川敷として放置されていたのが、宝永元（1704）年に旧大和川が付け替えられることによって耕地化されていくわけですね。旧大和川筋の玉串川とか長瀬川の周辺は、つぎつぎと新田化してまいります。大きなものは深野池を干拓した深野新田とか、みなさんもお存知の鴻池新田でございまして、安中新田とか天王寺屋新田、顕證寺新田などはそのような河川敷にできた新田です。

河川が氾濫しますと蛇行しますよね。その氾濫部分が河川敷を形成し、放置されていたところを、付け替えによって河川の幅が狭まったために、河川敷が耕地化できるわけです。そういう形で新田をつくってまいります。新田は必ず河川敷、あるいは自然堤防の上に開かれていますから、かつての河川敷を確かめようと思うと、長瀬川でも玉串川でもいいのですが、横切って歩いていただくといいんです。

私は以前に数年間、山本新田の端っこのところにあります西山本というところに住んでおりました。私の家は、北上する玉串川から西に下がったところにあるんですね。ですから、玉串川を渡ろうとしますと、必ずちょっと土地が上がるんです。そしてまっすぐ行きまして、川を渡って、御野縣主神社のところを過ぎ、東山本に入るとまた下がるんです。川を中心に台地を思い浮かべていただくといいでしょう。そういうふうには、河川敷に

きた新田というのは歩けばわかります。大和川が付け替えられ、その結果、狭まった河川の河川敷を開拓してできたのが新田だという、ひとつの証拠ですね。

それからもうひとつ、私が西山本におりましたときに、東大阪市の玉串というところにお住まいになっておられた政野さんという知り合いのご婦人のところへ、よく子供たちと自転車でまいりました。玉串への道は、玉串川の左右兩岸のどちらかを走っているんですが、それは要するにそこが自然堤防で、その上に道ができていたというわけです。しかも面白いことに、その堤防は河川面よりもかなり高いところに築かれており、道を通っていると、そこには必ず墓地があるんです。例えば万願寺村の墓地や、福万寺村の墓地が道の傍にあり、玉串に行く間に次々と通って行くわけですね。さらにその墓地の傍には大きな榎があったり、大きな楠があったりする。堤防の護岸を強くするために植えた木なんですね。それが200年、300年とすごく大きくなって、一番有名なのは門真の古川という川沿いにある楠で、大阪府の指定を受けている樹木があります。古川の堤防の上にどーんと立っているんです。

そういうふうにして人々が川と一緒に暮らしてきたところ、江戸時代の宝永元年に、大和川が現在のように西へ付け替えられ、旧河川筋は川幅が狭くなって、その周辺を開いてよろしいということで新田になったわけですね。もちろん幕府には、新田から収益が入ってまいります。また、ここに投資した人たちには小作料が入ってまいりますから、多くの人が新田開発の入札に参加いたします。ここ安中新田は、安福寺さんという柏原市国分にあるお寺さんがオーナーになるんです。ちょっと変わってます。鴻池さんがオーナーになったから鴻池新田と言いますが、安福寺さんが中心になった新田だからということで、安中新田という名前がついたのではないかとされています。

一般的に新田を開いた後に、幕府は検地をします。検地をした後は、年貢を納めなきゃならないんですが、それまでは開発期間ですから、「鍬下年季」と言って、仮に作物がとれても年貢はかけないという特別期間で、だいたい3年から5年あると言われております。しかし検地をいたします

と、そこから先は収穫が少なくとも年貢を納めなきゃならないということになります。

安中新田の場合、検地帳には、安福寺さんをはじめ12名の名前が土地所有者として載っているんですが、安福寺さんは、畑の実数291筆のうち131筆、ほぼ4割5分ほどを持っておられます。それ以外は八尾の慈願寺さんとか、植松の個人の方も参入しておられます。その意味で、鴻池新田のようにひとつの家が開発したんじゃなくて、安福寺さんを中心に何人かの人が寄り集まってきて、開かれてできた新田なんですね、ここは。

新田の石高は、享保6（1726）年の検地の時期がピークで、470石というふうになっております。江戸時代の村から言うと、ほぼ平均的な村の大きさです。植松は大きいですから、この倍近くありますけども、安中新田は470石、町歩数にしますと47町歩という規模になっております。当然のことながら、河川敷の新田ですからみんな畑です。また植松のように集落が真ん中であって、周囲に田畑がひろがるという形をとりません。新田を耕している人は、自分の住んでいる場所から通ってきますので、新田を開いても必要な建物は1ヶ所しかないんです。新田会所さえあればいいんです。新田会所っていうのは庄屋のお宅みたいなもので、年貢を納める時に絶対に必要なんです。植田家は、その会所が元になっています。

そういう意味で、新田というのは文字通り田畑を耕すためにだけできたものなんです。そこに人々が、会所を中心に次々と入ってくることで、徐々に集落になるんですね。享保6年の検地帳では、先程いいましたように畑が291筆あるんですけど、屋敷はわずか15筆しかないんですね。その中でも安福寺さんが3筆持っておられます。この検地帳を繰り返すと、291筆のうち、小字の名前が26出てまいります。たとえば出口とか、西脇とか、切堤きりてとか、長堤とか、柳原とか、中河原とかで、これらは名前から判断できるように、普段ならば作物を作らず放置されている場所です。切堤きりてなんていうのは洪水で堤が切れていた場所で、中河原というのは川の中にあつた場所なんですよ。そういう地名、小字というものが26あります。今日、植田さんにお聞きすると、このお宅の小字は森続もりつぎという字だそうで、検地帳

を見ると森続には畑が10筆で屋敷が1筆ございました。その1筆が安福寺さんの持ち家がありますので、それが会所ではないかなと思います。

つぎに先程の地図の話に戻ります。以上の話をもとに【図版2】を見ていただきますと、安中新田というのはどこからどこまでかが、すぐにおわかりになると思います。地図の右隅から北の方に奈良街道に沿って、長瀬川が流れているのがおわかりになりますよね。地図のやや右下をみると、八尾木村のすぐ左下の川沿いに天王寺屋新田がありますよね。そこから1kmほどザッと川に沿って北上して下さい。そうすると、久宝寺村があり、その右に顕證寺新田がありますね。この顕證寺新田から、先ほどの天王寺屋新田までの間、長瀬川に沿った両側が安中新田なんです。

こうした新田からは年貢が上がってくるので、例えば鴻池新田会所には大きな蔵が3つあります。文書蔵を入れると4つあるわけですが、それらの蔵は、年貢の収穫期になったらお米を集めさせて、俵になおし、年貢として収納するわけですね。それと同じ役割を、この安中新田の植田家の元である会所がするわけですね。新田では、会所の役人を普通は「庄屋」と言わずに「支配人」という言い方をします。そこ全体を支配するマネージャーですね。後には他村並みに庄屋という言い方をしてくるようになりますけれど、当初は支配人です。そういう支配人として、植田さんが、新田ができて100年ぐら経ってから入ってこられるわけですね。その意味でこのお家は、いわば安中新田のシンボルなんですよ。

今日、この家に入られた方はおわかりになると思うんですが、仮に470石で年貢をとったとしますと、五公五民であっても200石ぐらいの年貢がとれるんですね。もしそれを全部米で納めたら俵数がいくつで、この生活器具を入れてある2つの土蔵に入るだろうか怪訝に思われた方もおられるでしょう。それは無理です。ところが安中新田では米を作らないから、大きな蔵は要らないのです。全部綿を作るわけですから、綿はみんな売ってしまいますので、年貢は銀で納めたらいいんです。ですから鴻池新田のような大きな米蔵は要らないのです。

江戸時代の終わりの年期をもつ検見帳という資

料がありますけれども、その帳面を見ると、ここは木綿を作っているんですね。先程の熙連伊さんの話にあったように、綿は全部換金させて銀で納めますので、この蔵の中にお金が入ることがあっても、米が入ることはなかったんです。それがこの新田会所の蔵の小ささを証明している、というふうに考えていいのではないかと思います。

この新田に住んでいた人たちは、徐々に増えてくるようであります。例えば享保6年には屋敷数が15筆というふうに申しあげましたけれども、江戸時代の終わりになりますと、かなり家数も増えてきて、安政5（1858）年には32軒の家が建って、120人が住んでおられました。要するに、どんどん畑を潰して屋敷にしていくということで、集落ができ上がってくるわけですね。

さて植田さんは、ご先祖が宝暦12（1762）年に、この新田に入られたということが史料からわかっています。これは去年から今年にかけて、学生・院生諸君や資料館の人たちが調査してくれたことによってわかったことです。この新田に入られたきっかけは、最大の地主であった安福寺さんの誓眷上人という人の縁で、「御寺のかし付田地諸勘定向取締」のために入ったと史料に出てまいります。お寺が、どうして新田の地主になるんだとみなさん思われるかもしれませんが、実は今と一緒に、お寺さんというのは江戸時代も法人税がかかりませんから、お金を持ってはるんですね。しかも安福寺さんは、尾張徳川家の保護を受けておられ、大坂では名刹と言っているくらい由緒あるお寺なんです。尾張の殿様がスポンサーとしてついているわけありますから、お金があるんですね。お金を持ったらどうするかと言うと、もちろん金を貸すんですね。金を貸したら、当然のことながら返しますよね。普通の町人から金借りても踏み倒しますけど、お寺さんからお金を借りて踏み倒したらバチが当たりますよね。そういうのを「祠堂金」と言います。あるいはうちの寺のお堂が壊れたから何とかしてほしいという、みんな無担保で貸してくれるわけですね。そういう意味でお寺というのは、鴻池なんかと並んで、投資の主体になれるわけですね。

しかしながら、お寺のお坊さんは商才に長けているわけではございません。顧客の管理とか、マ

ネージメントができるわけではございません。そうすると、そこは「蛇の道は蛇」じゃないですけど、商いの道は商いに長けた人がいいだろうということで、おそらく植田林蔵と呼ばれたんじゃないでしょうか。

植田家の系譜によりますと、植田家はもと大和国田原本の藩士平野権内に仕えた梶尾勘兵衛と称しているとあります。しかし江戸時代は、先祖は武士から興った家であるという言い方をみんなします。それが江戸時代という「武士の世の中」の常識なんです。しかしそれは出自を武士に持つというだけの話で、本当かどうかというのは、あまり意味をもたないことだろうと思います。むしろはっきりしていることは、この植田林蔵という人は、かなりの商才を持った方、あるいは経理に明るい方だったのでしょう。だからその才能を見込まれてこの新田のマネージャーとして招かれたと、私は理解をしております。これは後で触れますが、植田家の人々の頭の中を覗く時に興味深いのは、出自が武士だというふうに言いながら、実はかなり商才があったということですね。自分の家の系譜としては武士でいきたいわけですが、実際は商いをやっているわけですね。実際、この家の暮らしは武士的だったのか、商人的だったのかということは、その頭の中を覗いてみると、少し見えてくるのではなからうかと私は思います。

なお植田林蔵が入るまで、安中新田は誰が管理していたのかという問題がありますが、これについては、『河内どんこう』という雑誌の中に、ご当地の山野としえさんがお調べになった論稿があります。それによると、林家や辻田家、中務家などの諸家が管理されていたようでもあります。しかしながら、もうそれらの家は途絶えておりますので、本日は植田さん以前については触れません。

## 2. 植田家の人々と学芸

先ほど、植田さんは1760年代に当地に入ってくると申しました。そうしますと、その後、およそ240年ここにお住みになっておられるんですね。関西大学は今年、創立120周年と言っているんですが、その倍です。この空間の中で、240年の歳月が一日一日と重なっていくのだと考えますと、僕は歴史を研究している人間として有難さ

を感じるんですね。人というのは誰しも、一日一日しか日を重ねられないんですね。どんな素晴らしい人でも、十年いっぺんに年をとることはできないんですね。その歳月が、この屋敷のなかに240年分、たまりたまつたと考えるということは、ある意味で言うと、今回の調査は、浦島太郎が玉手箱を開けるようなところがあるんですね。そういう楽しみが、この空間には詰められている、というふうに考えてみていただいたらいいと思うんです。

宝暦12(1762)年に入ったのが初代の林蔵という方だと考えますと、明治維新の頃の当主は5代の一郎になります。初代の林蔵は、宝暦から寛政年間、みなさん御存知の人で言うと、田沼意次とか松平定信の時代だと考えて下さい。それから、2代林蔵さんは天保5年に亡くなっておりますから、將軍家斉の時代、文化・文政期だと思っただけといいでしょうか。3代の林蔵さん、これは4代の市太郎さんと兄弟でして、この兄弟はかなり有能だったようで、この二人の時代以降、資料もかなりたくさん残ってまいります。二人とも文政から天保ぐらいに生まれておられます。したがって、天保改革の時期ぐらいに成長期を迎えられた人だと考えてみていただくといいでしょうか。まずお兄さんが庄屋になって、後に弟の市太郎が庄屋になる。そしてこの市太郎さんが明治維新を経まして、5代目の一郎にバトンタッチして、この人が明治・大正を生き抜くという形になります。このうち、比較的当時の様子が資料によって見えてきたのが、4代の市太郎と5代の一郎の親子でございます。これから、この二人の時代のお話をちょっとしてみようかと思います。

私は常々、当時の人々のことを知るのに一番いいのは「日記」だと思っているんですね。ですから日記があると一番いいんですが、今のところ残念ながら、植田家の資料の中では日記が見つかっておりません。それからもうひとつは「手紙」ですね。その人間がどういう考えを持っていたか、誰と親しかったかなど日常生活の一齣を何気なく表現してくれるのは、手紙ですよ。例えば朝6時に起きた、普段は遅いんだけど今日は早く起きたと書いてありますと、ああこの人は朝が弱かったんやな、僕みたいだな、ということがわか

るわけですよ。そういう意味で、日記とか手紙というのは、何気ない情報を教えてくれるんですが、今のところはまだ日記については見つかっておりませんし、手紙の整理はもっとこれから時間がかかることであります。

そうすると、手紙や日記を抜きにして、人々の頭が何で覗けるかと考えました。植田さんだけに見えるような特色は何なのかということを考えて時に、ひとつ思い当たりましたのは本です。書物なんですね。植田さんは、こちらの蔵に大変たくさん書物を集めておられます。書物の整理の方は、私共の研究員の松本望が中心となって進めております。そして、この整理はほぼでき上がりましたので、これからお話するのは、その書物の整理の中で出てきた話でございます。どんな書物があるかというのはこれから少し紹介いたしますが、実はかなり多種多様にございます。しかも240年の間、植田家の人々はつぎつぎと本を集めてこられたわけですね。

例えば、私の家へ行きましても、私がどんな人間なのかということは私の本棚を見たら少しわかるわけですね。堅い本も置いてありますけど、その中にNHKで放送されていた「チャングムの誓い」の本が3冊セットで並んでるわけですね。「あ、これ奥さんが読んでるんや」とか、「チャングム好きなんや」ということがわかります。そういう意味で、書棚を覗かれるということは、その人の頭の中を覗かれることにもなるんですね。そういう意味で、私も自分の家を覗くかのようにして植田家の書棚を覗いてみました。

実際に覗いてみると、他の庄屋の家と区別がつかないのは謡の本であります。謡というのは江戸時代の男性が人前で付き合う時のたしなみですから、謡がうたえなかつたら人として認められないというふうに言われております。特に商家であればそうでありました。能・狂言をする人は余程変わった人ですけど、謡は誰でもやります。当時の人は普通にみんな謡好きでありますから、謡の本はどこの家にもたくさん残っております。大坂とかその周辺では、特に江戸時代の後期になると、男に生まれたら謡をやる。また謡をやる副次的効果があるらしいんです。それは方言が直るんですね。方言を直すには謡の文句を口ずさみさせた

らしいというふうに使われているんです。

ところで、私が謡の本以外で注目したのは、ひとつは「往来物」です。この家には、往来物が実にたくさんあるんです。「往来物」というと「庭訓往来」があります。みなさんにお渡ししたプリントの中に「庭訓往来」の一節を入れておきました。「庭訓」とは、庭で教えるということですね。【図版3】をみていただくといいかと思いますが、これは『庭訓往来』の写本です。「庭訓往来」は、江戸時代の人たちが男も女も勉強をしようと思ったら、まずこれから教えられたテキストだと考えてください。後で少し説明いたしますが、この「庭訓往来」のはじめ、「春の始めに」という句ですね（【図版4】）、これは南北朝の時代にすでに成立しています。この本は手紙、「往来」ですから往く手紙と来る手紙ですね、その文例が収められています。この「春の始めに御祝い貴方に向かい先

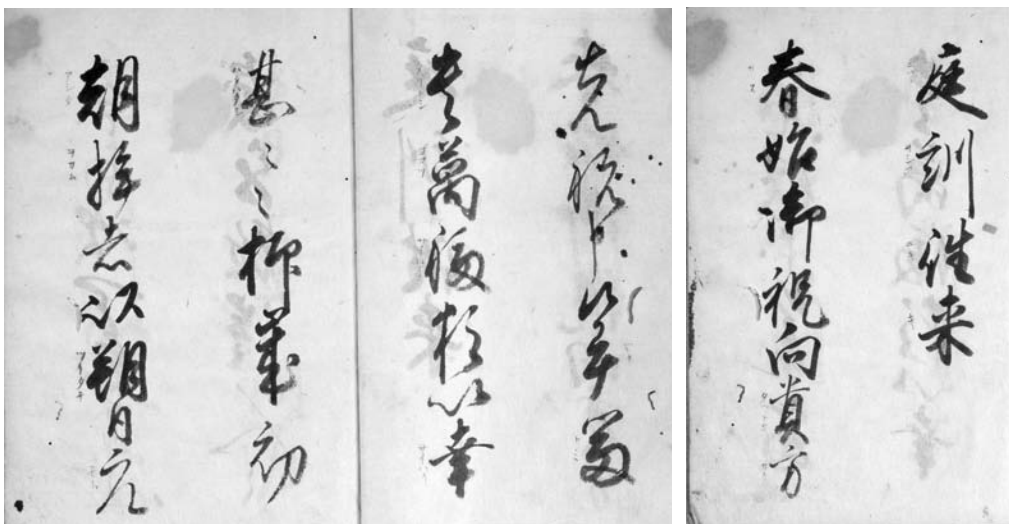
ず祝い申し候おわんぬ」というのはこちらから出すお手紙です。それに対してお返しの手紙がまいります。これを12ヶ月分収めてあるんですね。ということで、これを勉強すれば、12ヶ月の手紙が書けるわけですね。今で言う手紙文例集だと思っただいたらいいいと思います。

もうひとつは『商売往来』ですね（【図版5】）。すごいでしょこの手垢。もう、何人の人がこれを読んだでしょうか。普通、本の後ろには刊記つまり奥付が載るんです。『商売往来』の場合、出版者が最後の丁の左隅にしか書いてないんですね（【図版6】）。これは書誌学的には「半紙本」という小さな本です。『女大学宝箱』と比べていただきますと、サイズの違いがよくおわかりになりますね。謡はこれよりもさらにもうひとつ小さい本なんですが、この『商売往来』はおそらく、植田さんの書庫の中で一番古い本のひとつではないかと思うんです。『商売往来』というのは、江戸時代の大和川付け替えができた頃、宝永年間から享保年間にできたと言われています。ところが作者も出版者もわかりません。要するに商売をやる人たちが何を知っていたらいいかということで、「凡商賣持扱文字員数取遣之日記（およそしやうばいもちあつかいもんぢぬんじゆとりやりのにつき）」で始まります。商人にとっては何が重要なのかについて、漢字で書いてあります（【図版7】）。

後でも触れますが、京都大学の教授で中国学の権威だった内藤湖南という人は、『庭訓往来』と『商売往来』を指して、「日本人が中国の直輸入の教科書からはじめて離脱して、国語で書いた日本人向けの教科書はこれに始まり、これに完成する」

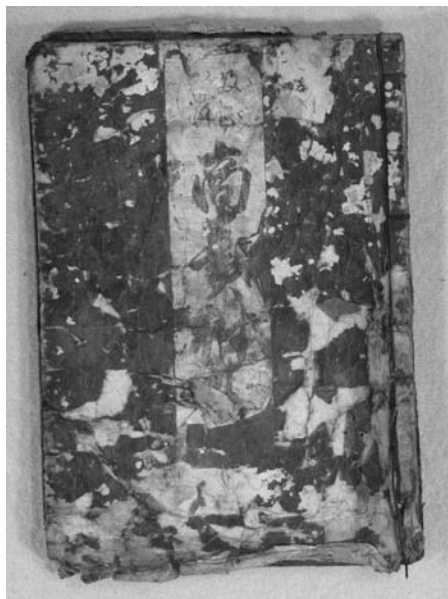


【図版3】写本『庭訓往来』



【図版4】写本『庭訓往来』冒頭





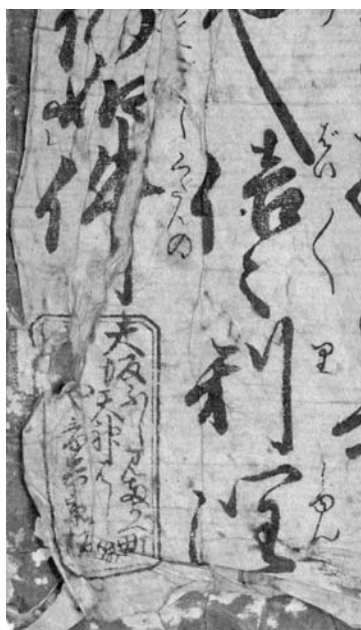
【図版5】『商売往来』



【図版7】『商売往来』冒頭



【図版6】『商売往来』刊記



(拡大)

と書いています（『日本文化史研究』下）。南北朝時代に始まって、江戸時代の享保年間に『庭訓往来』や『商売往来』ができてくる。その後、これらのまねをして『職人往来』や『百姓往来』だとか、それぞれの身分別のものが出てくるんです。この『庭訓往来』と『商売往来』は数百年にわたって日本人が手にし、手垢を付けて読んだのだらうと思いますが、植田さんには実は、この『商売往来』の異本が多いのです。明治になると『開化商売往来』ということで、明治時代の文明開化に合わせたような『商売往来』も出てくるんですね。植田さんの蔵書を見たとき、日本人が平均的に受けた教育の流れというものが、辿れるのではないだろうかというふうに思ったんです。

もう一つは、私は女性史を研究しておりますので、植田家の人々といったら男もいるけど女もいるだろう、植田家の女性はどういうふうにして育てられたのだろう、これを探してみたいと考えました。僕が植田家をやりたいのは、実はそれが目的なんです。男性のことはどちらでもいいんです。女性のことを知りたいんです。女性のことこそ知りたいんです。

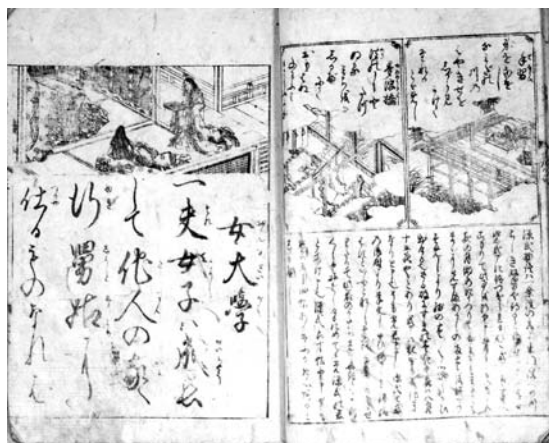
この本表紙だけみると、はがれて何と書いてあるかわからへんでしょう（【図版8】）。しかし開けますとね、『女大学宝箱』なんです（【図版9】、【図版10】）。貝原益軒が作ったとされています。江戸時代の日本女性の最大のテキストとされた本がこれなんです。これだけ厚いんですよ、見て下さい。女に学問は要らん、と言いますけれど、『商売往来』の方はこれだけ薄くて済むんですよ。江戸時代、「女性は無学文盲がよし」という意見が



【図版 8】『女大学宝箱』表紙



【図版 9】『女大学宝箱』見返し・扉



【図版 10】『女大学宝箱』冒頭

ありますけども、そんなバカなことはありません。『女大学宝箱』1冊読もうと思ったら、『商売往来』より文字が多いんです。

『女大学宝箱』の一番後ろには「女中の見給

ひて益有書物目録」、つまり女性が読んだら為になる書物にはこんなものがありますよ、ということで書名がずら一っ書いてあります（【図版 11】）。これをご覧になって、江戸時代の女性の教育というものを見直していただきたいと思うんです。これらが全部こういう形で本として提供されるわけです。お金さえあれば買える。仮にお金がなくとも、少しのお金があれば貸本屋から借りることができるわけですね。安中新田では植田さんとこ行ったら読ましてもらえないか、ということになるわけです。

このようにして女性向けの本が、生まれたわけです。ところが、これらの本を何人の女性が読んだかについてはわからないんですが、多くの女性が読んだことは、明らかなんです。私にとって初めてのことだったのですが、植田家には『女大学宝箱』の版の違うものが3冊あります。ですからこのお宅は、女性教育をやっておられたに違いないと思っています。だから今後、女性の書いた史料が出てくるのを楽しみにしています。

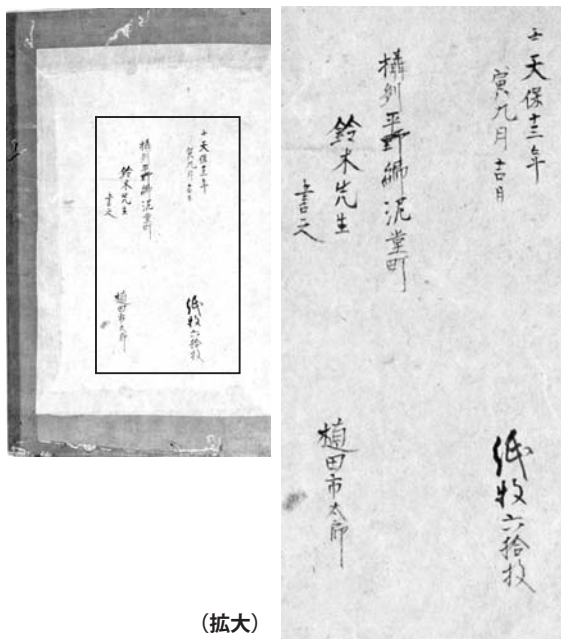
ただし、この家はひよっとしたら寺子屋の師匠であったかもしれない。私塾の先生であったかもしれない。そうすると『商売往来』も1冊だけじゃなくてたくさん持っていてもいいわけですね。

植田家では、男の子であろうと女の子であろうと、子供が生まれると幟をたてて祝うと同時に、『庭訓往来』や『女大学宝箱』を読ませて教えていたかもしれない。そうすると子どもの生育過程というものが、こういう書物から見えてくる。それが往来物というもののすごさんですね。

そこで次に生育過程を実際にたどってみたいと思うのですが、材料として『庭訓往来』を用いてみたいと思います。『庭訓往来』はもっぱら版本が多く、それで勉強いたします。だからこれだけ汚れるわけですね。そして御存知の方もおられると思いますが、文字あるいは書道のテキストであると同時に、そこに音とか訓が振ってありますから、漢和辞典と国語辞典の役割をするんです。さらに商売用のビジネスの知識が入るわけですね。女性のものも同じことです。『女大学宝箱』には、最初に農業の風景が書いてあります。男であろうと女であろうと、お米はどのようにしてできるかは知っていなきやならない。さらに開いていくと、



【図版 11】「女中の見給ひて益有書物目録」



(拡大)

【図版 12】写本『庭訓往来』奥書の書込み

今度は「源氏物語」がダイジェスト版で出てくる。つまり往来物というのは、要するに百科事典に近いと考えていただけたらいいでしょう。

「庭訓往来」の本文を見てみると、例えば、男という字は「おとこ」とも読むし「なん」とも読

むと書いてあるんです。そういうことが理屈じゃなく、読んでいくとわかるわけです。ですから、往来物というのはそれこそ、使い方によってはいくらかでも教育効果が発揮できるんです。

植田家には『庭訓往来』の版本がたくさんあるにも関わらず、写本も1冊あるんです。写本というのは、本の内容を書き写したもののなんですね。しかもこの写本を開けてみますと、非常に丁寧に書いてあるんです。これを最後まで見ますと、最後の奥書のところに、「天保十三年寅九月吉日」「紙数六拾枚」「摂州平野郷泥堂町鈴木先生書之」と書いてあるんです。そして下に「植田市太郎」とあります（【図版 12】）。要するにこれは、平野郷の鈴木何某という、寺子屋か私塾の先生かどうかわかりませんが、その先生が、版本で勉強するよりも手書きの本で勉強する方がよいだろうと、わざわざ市太郎君のために書いて渡したテキストなんです。この世に1冊しかないテキストなんです。ところどころに落書きがありますが、それはたぶん市太郎君のものではないかと思えます。その一つに、龍の絵が描いてあります（【図版

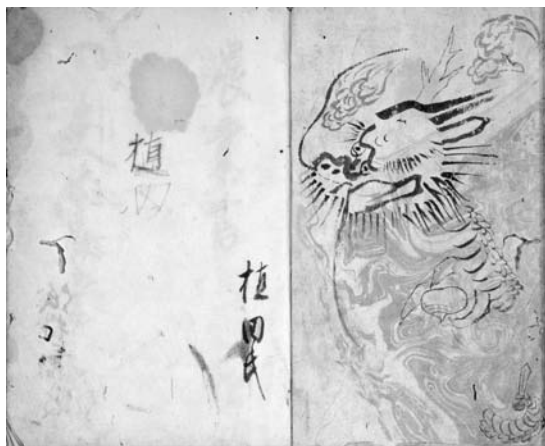
13])).つまりこの写本は、先生と生徒の間を行き来した書物なんです。

この写本の『庭訓往来』が面白いのは、通常は「春始御祝」から始まるんですが、この本には一番最初に「農業書」が書かれてあるんです。「一、夫れ生まれ農業之家の輩は、幼稚之時より農人の風俗を見習い」と書いてある(【図版 14】)。すこし言葉を足しますと、「庭訓往来」の示す教養は、別に職業は関係ないんです。人として生まれたらこれを勉強しなさいという書物で、いまの大学で言う一般教養のようなものです。ところが江戸時代の社会は身分制の社会ですから、商売人は商売人のことを教えなきゃならないし、百姓は百姓のことを教えなきゃならないわけですね。ですからこの鈴木先生は、「お前は安中新田の農家に、田舎に、村におるんだから、生まれた以上は農として、この心得を身に付けなさい」ということをわ

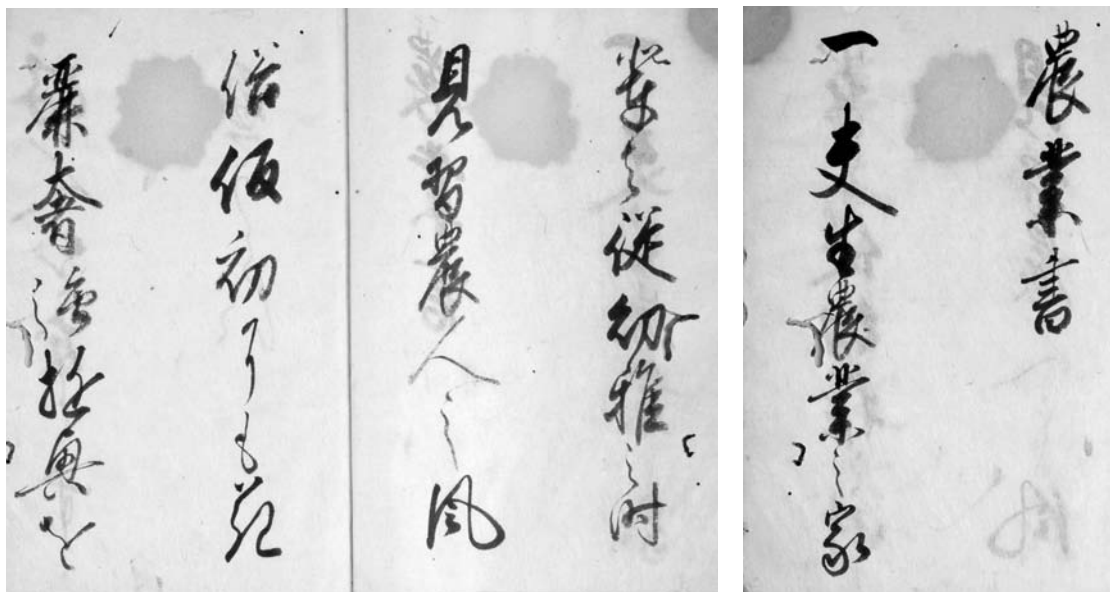
ざわざ書いてくれたんです。そういう前書の入った『庭訓往来』です。

さらにめくりますと、途中から日付が入っているんです。「中間」の左方に、「卯正月廿九日」って書いてあるでしょ(【図版 15】)。最後の奥書から、この本を市太郎君がもらったのが天保 13 年寅 9 月だということがわかります。したがって卯というのは翌年ですね。要するに、市太郎君が勉強した日にちをこうのように書いているのではないかと考えられるのです。この本の中には、そういう日にちが何箇所か入っています。言い換えると、家で毎日毎日勉強をやっていったのではなくて、先生がお宅に来られて、「はい、今日はここからここまでやりますよ」と先生に読まされて、終わり、「次は何月何日来ますから」、ということで、またそこから始める。そのときにこの日付を書いていったのではないかと、というのが私の推測であります。つまりこのテキストは、一面、子どもの学習過程を示すものだということになるんですね。

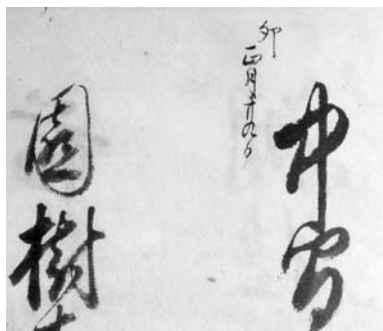
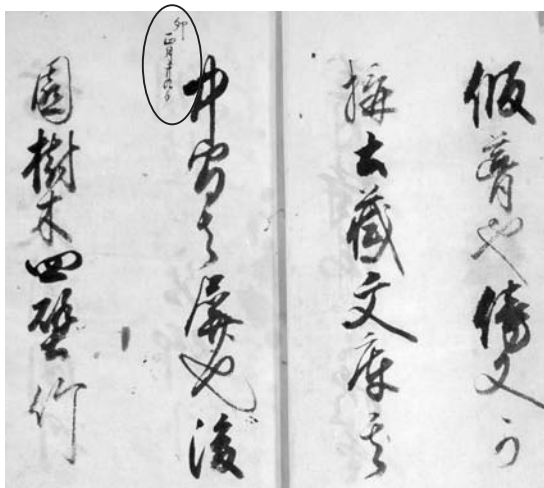
学習過程は、最後のところで終わればよかったんですが、このテキストは、【図版 16】で見られるように「琵琶法師縣神子」で終わっているんです。これが「庭訓往来」の途中であることは、【図版 17】からわかります。舞妓とか傀儡とか田楽とか、さまざまな職人の人がリストアップされている部分に続いて、「縣神子」というのが出てくる。手持ちの資料【図版 17】の前から 4 行目にあり



【図版 13】写本『庭訓往来』龍の絵

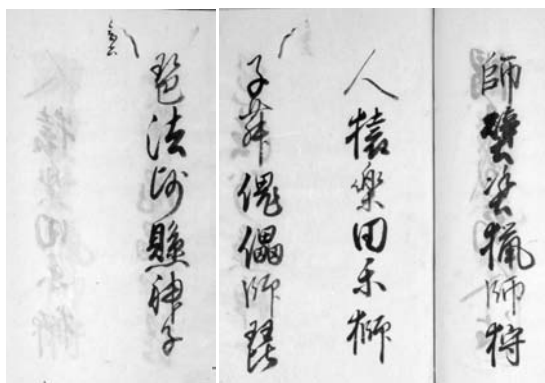


【図版 14】写本『庭訓往来』の「農業書」



(拡大)

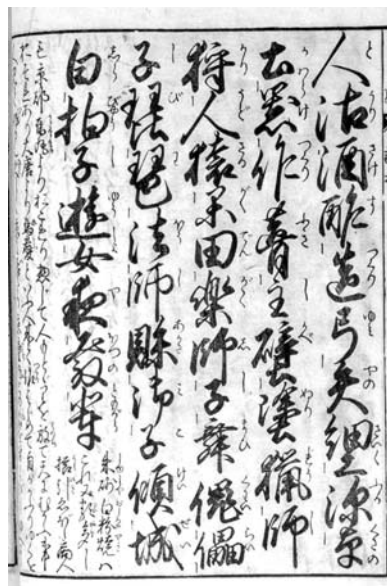
【図版 15】写本『庭訓往来』中の日付記入例



【図版 16】写本『庭訓往来』巻末

ますよね。ここで終わっているんです。ということは、この写本の『庭訓往来』は最後までいかに、先生が匙を投げたか、市太郎君が嫌いになったか、なんらかの理由で学習は途中で終わってしまったことを意味します。本1冊で、なかなかすごいことがわかんと思いませんか。したがって児童の学習過程をしめす史料として、この写本はお宝のひとつにしたいと思うものです。

この市太郎君は、長年、八尾で教育史の研究をしてこられた森田康夫先生によると、植松の松林寺のところにあった菅蘆舎で学んだということで



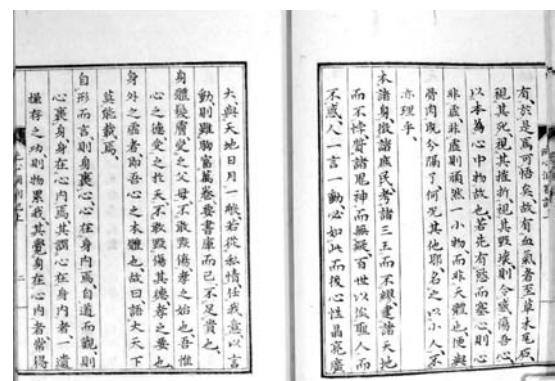
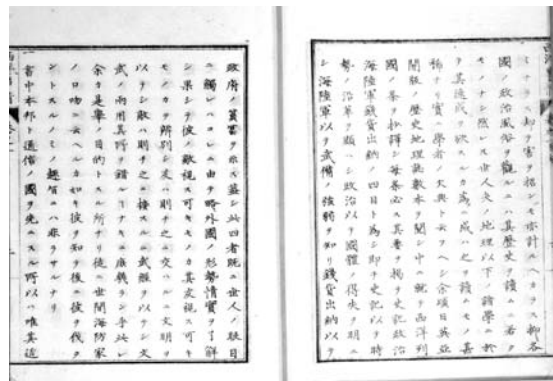
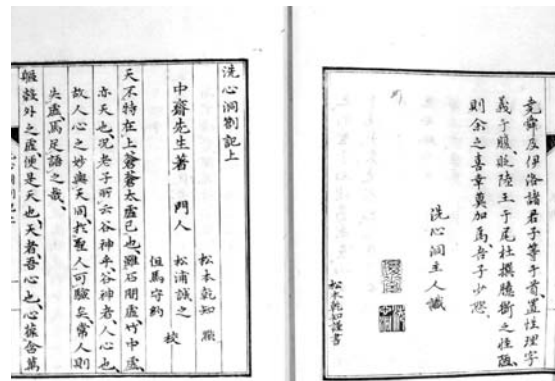
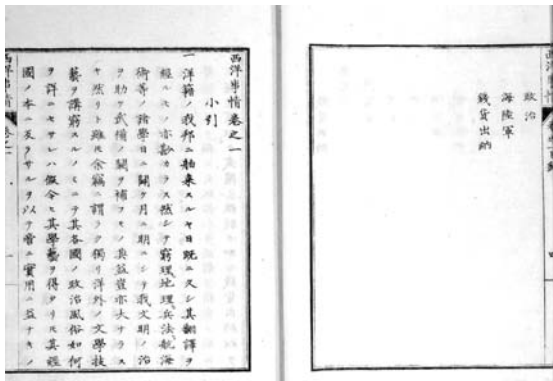
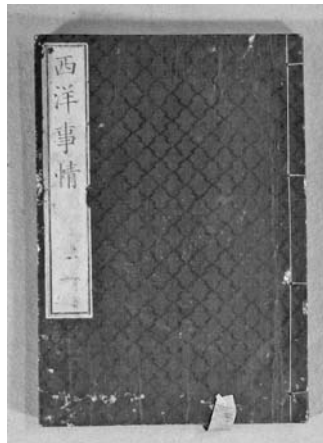
【図版 17】『庭訓往来絵抄』の部分

あります。現在、記念する碑が建っております。ですから、市太郎君は初等教育を終え、中等教育まで進んでいたということがわかります。

5代目の一郎さんについては、もっと時間をかけて研究する必要があるかと思ひます。おそらく植田家のキーパーソンだと言つていいだろうと思ひます。

まずは『日本教育史資料』に、この方は寺子屋の教師として出てまいります。隆盛期は明治5(1872)年で、生徒が30人いたと書かれています。さきほど私は、これだけの往来物があるのは、この家では教育が盛んであったというだけじゃなくて、他人に教育を施そうとされていたかもしれないと申しました。他人に教育を施すためには、まず誰かから教育を受けるわけですね。それを順繰り順繰り広げていくわけです。そういう意味で言えば、他人から教育を受けた段階から、今度は自分が、そのお返しを他人にするという意識が植田家にあったのではないだろうか。そのために、往来物は何度となく使われたのではないだろうか。それが、この往来物の激しい使われ方に現れているのではないかと思ひます。

それに対して、明治期の一郎さんの時代になりますと、文明開化期ですから例えば、福沢諭吉の『西洋事情』があります。あるいは植木枝盛の『民権自由論』という本もあります。『民権自由論』はちょっと傷んでいたんで、ここに福澤諭吉の『西洋事情』を持ってきましたが、きれいで



【図版 18】『西洋事情』

【図版 19】『洗心洞劄記』

ね。あまり読んでないんじゃないでしょうか。先ほどご紹介しました往来物と、使われ方はまったく違いますね（【図版 18】）。

京都大学人文研究所の横山俊夫という方が、『節用集』という百科事典を研究されたんですが、その調べ方が面白い。普通、本をめくると手垢がつかますよね。これを全部調べて汚れ、損傷している頻度から、その本のどこが一番よく読まれたかということを探り当てようとされたんです。皆さんお宅に『広辞苑』があると、手垢の付いたところはよく引いたところで、それは限られているでしょう。一度も引かなかつたら、手垢がつかませ

ん。つまり福澤諭吉の『西洋事情』や植木枝盛の『民権自由論』は、文明開化の世の中だから買ってはみたものの、ほとんど読まなかったのではないのでしょうか。そういうことも、本が汚れてないことや、朱がほとんど入ってないことから見えてきます。

ほかに植田家には『洗心洞劄記』という、大塩平八郎のたいへん有名な本がありますが（【図版 19】）、これもおそらく1回も触れたことないかというくらいきれいなんです。ところが門真市の茨田郡士をはじめ大塩平八郎の門人たちの家にある大塩の著作には、たくさんの朱が入ってるんで

す。実際に読んだという証拠です。だから本を読んだか読んでいないかは、本を開いてみたらわかるんです。読んでない人の本と、読んだ人の本には絶対、違いがあるんですね。つまり飾りとして買ったのか、ほんまに読もうとして買ったのかという違いは、丹念にたどっていけばわかるということになるかと思います。植田一郎さんが、この『西洋事情』を含めて、どのような学習過程をたどられたのかということは、これからの課題だと思います。

ところで、植田一郎のような人物を我々の世界では「名望家」と言っております。要するに豊かな家の資産のお陰で高等教育を受けて成長し、その成果を地域の人々のために返すために、地域の人々にとって難題があれば、中心的な担い手としてその解決に当たる、したがって村長にもなる、みんなに推されたら府会議員にもなる。こういう人たちは各地にたくさん出ます。例えば八尾で言うと、万願寺の久保田真吾もその一人です。

大阪が誇っていた木綿が、インドから入ってくる安い木綿に対する関税を低くされると、全部やられちゃうんですね。それを撤廃させようというような政治運動もおこす。その一人が、植田一郎なんですね。

植田一郎さんはそういった政治活動をし、名望家として地域のために活躍する人なんですが、どのように教育との関わりがあったのかということ調べていったときに気になったのが、明治期の漢学との関わりなんです。私がいま、関心を持っているのは懐徳堂と泊園書院です。懐徳堂は、享保9（1724）年にでき、泊園書院は天保13（1842）年にできるんですが、どちらも大坂が誇る漢学塾です。懐徳堂は明治2（1869）年に潰れてしまいましたが、その後、泊園書院がひとりで頑張って、昭和20（1945）年まで続くんです。

明治期の漢学との関わりについては、植田さんの蔵書にも見えるんですが、八尾市内のあちらこちらに建っている碑にもあらわれています。例えば築留二番樋が明治21（1888）年に、木製から煉瓦製に変わったのを記念して建った碑には、泊園書院2代目藤沢南岳が碑文を書いています。ほかに南岳が碑文を書いたものを探しますと、植松にある、長崎桂齋・司馬太郎親子ですね、この



【図版 20】『懐徳堂旧記』

碑文も藤沢南岳が書いているんです。それから万願寺にある、久保田真吾が服部川を改修した碑にも、南岳が詩を書いているんです。その万願寺の碑には、「余、君と交わる二十餘年」と書いてあるんですね。いわば、大阪府下の名望家と大阪の漢学塾泊園書院がピタッとつながっている。

ここに植田家蔵書の中から、『懐徳堂旧記』というのを持ってまいりました（【図版 20】）。懐徳堂は、さきほど言いましたように、145年間、江戸時代後期の大阪で全国にその名を知られた学校、知らない人はないというぐらい有名で、適塾なんて比じゃないんです。適塾よりも、この懐徳堂の方が、大阪の学問を語る時にはなくてはならないんですが、明治2年に廃校になりました。その後、復興のためにいろいろと企画され、明治44（1911）年になってようやく復興されるのですが、その際、懐徳堂記念会というものができる。そのセレモニーが、お渡しした「懐徳堂祭典執行次第」（【図版 21】）です。

江戸時代後期の大阪の学問的伝統、とくに漢学は明治に入って欧米の教育制度や学問がどんどん

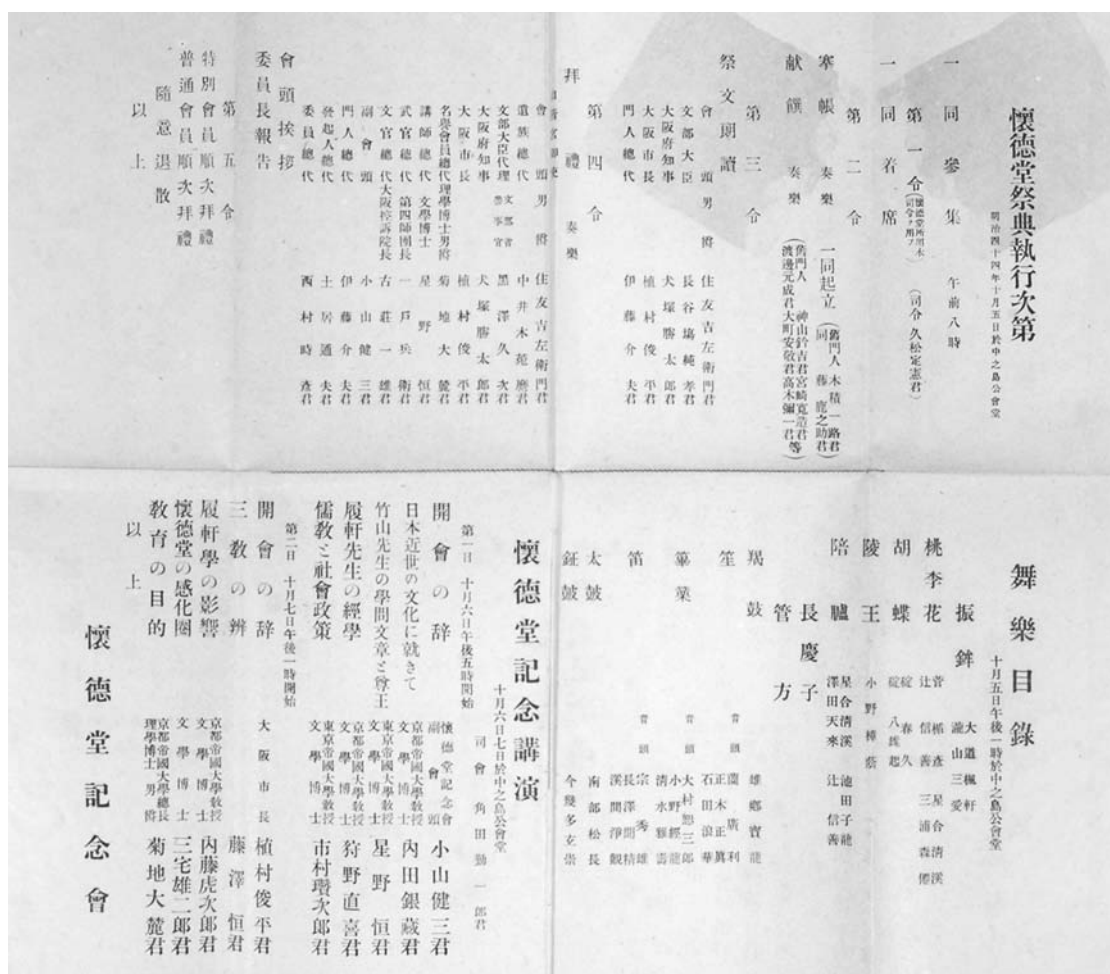
入ってくることによって一旦、廃れてしまいます。それを明治30年代ぐらいから、西村天囚という学者・記者が懷徳堂の復興を起案いたします。「懷徳堂祭典執行次第」の上段に儒教の礼式とさつきが書いてあって、「第四令 拜禮」の最後に西村時彦ときひこというのがその人で、天囚という号を持っているんです。当時、朝日新聞記者でした。その隣に土居通夫と書いてありますね。大阪商工会議所の会頭でございます。それから小山健三というのは、銀行家だったと思います。それからもっと右にいくと、住友吉左衛門の名が見られます。要するに大阪の政界、財界に民間の人たちが加わって懷徳堂が復興するんです。

当時、明治44(1911)年ころは、日清戦争と日露戦争が終わって、日本がものすごく西洋化している。同時に資本主義の矛盾も強くなってきて貧富の格差が無視できない、社会主義運動も起こってくる。国民としての一体感が失われつつある。そういう時に、西村たちは懷徳堂を復興しようとするんです。なぜか。漢学というのは、中国の学問じゃないんです。忠・孝という人間のモラ

ルを、最も大事にしてきた学問なんです。それが今、西洋化した大阪で失われているものであるということで、復興しようとするんですね。

西村天囚らの思いはそうだったかもしれないですが、私が「懷徳堂祭典執行次第」を眺めてみたときに面白いと思ったのは、彼らは懷徳堂を復興しようとしながら、別の面で、江戸時代の大阪が持っていた、あるいは大阪が歴史的に育んでいた伝統を、復活しようとしていることなんです。【図版21】の上段に、拏帳、献饌、祭文とありますが、これは儒教式のお祭りで、釈奠と言います。現在大阪府下では、泊園書院の伝統を受け継いで、道明寺天満宮が続けておられますが、要するに孔子様の前でおこなう拝礼なんです。これを復興しようとしています。

もう一つは下段に、舞楽が奉納されています。関西大学なわ・大阪文化遺産学研究所が10月28日、関西大学120周年記念事業として、関西大学の中庭で、1,000名を集めておこなう予定にしているのが、この舞楽です。大阪の舞楽は、宮内庁に雅楽部ができた関係で楽人が東京に



【図版21】懷徳堂祭典執行次第



移り、一旦、失墜します。それが、この時の懐徳堂祭典において再興されました。この舞楽を再興したのが、懐徳堂祭典で「陵王」を演じている小野樟蔭という方なんです。

それから「桃李花」という演目には、菅楯彦の名前が見られます。この人は左方の楽人を自称した人で、鳥取の倉吉出身の日本画家で大阪名誉市民第一号です。このように近代になって、西洋文明が大阪を席卷し、社会の矛盾・不満が社会主義運動として出てきているなか、懐徳堂を復興しようという大きなイベントが起こるわけですが、そのイベントの中に、儒教の儀礼と舞楽が復興してくるんです。いいかえると懐徳堂の再興は、大阪文化の復興のプロジェクトでもあったのです。

### おわりに

最後になりますが、西村天囚は鹿児島島の種子島の出身です。大阪に出てきて、朝日新聞社に拾われて、勉強いたします。菅楯彦は先ほど言いましたように、鳥取倉吉の人です。一方、小野樟蔭は大阪の願泉寺という西成にあるお寺の住職です。江戸時代の大坂文化が、明治になって廃れる危機があった時に、生まれも育ちも違う彼らが、それを復興しようと企てたんです。まさに文化遺産として復興しようという動きがあった。西村天囚は、大阪人文会というものを明治42(1909)年につくります。そして大阪の政界・財界の人たちにも呼びかけて、懐徳堂の復興を計画するのですが、西村天囚は「懐徳堂は大阪の公有物である。大阪のみんなのものだ」といいます。その動きに植田一郎は、特別会員として、全国166人の中のひとりとして加わるんですね。

我々は今、高橋センター長を中心として、大阪の失われてきた文化遺産の復興運動をしているんですが、我々が最初ではない。ひょっとしたら懐徳堂の復興というのは、大阪の古きよき伝統、いわば文化遺産を復興しようとした、最初の動きであったかもしれない。もちろん戦後になっても行われ、我々が現在、受け継いでいる。ただ今の我々の方が有利なのは、皆さんのように地域に根ざして、文化を支えて下さっている方が多数、いることです。しかも頭の中だけではなくて、着ていたものとか、建物とか、文化遺産の各方面について明らかにできる人たちが揃ってきているわけですから、条件たるや、この時代の人たちよりもはるかに優れた条件を持っているわけであります。しかし、志はひとつなんです。大阪が持っていた文化の遺産や伝統を、今によみがえらせたいということなんです。そのような意味で、植田さんの資料は、そういうことの手がかりも与えてくれるんじゃないかと思っています。

最後は手前味噌的なこと申し上げましたが、これで報告を終わらせていただきたいと思います。どうぞ清聴ありがとうございました。

### 藪田 貫 (やぶた ゆたか)

関西大学文学部教授。当センターでは総括プロジェクトリーダーと学芸遺産研究プロジェクトリーダーを務める。専門は日本近世史。

現在、女性史を中心として国内はもとより、海外においても研究活動を広げている。

近著に『日本近世史の可能性』(校倉書房 2005年)、『近世大坂地域の史的的研究』(清文堂 2005年)がある。



植田家調査風景 (左) 古文書調査 (右) 書籍調査

## 市指定文化財旧植田家住宅整備について

## 八尾市文化財課



岸本 邦雄 課長

どうぞよろしく申し上げます。今高橋センター長の方からご紹介ありましたけれども、自分が公務員だということは信じられません。実はほかで紹介していただくときは、私は河内のいっちょかみという形で紹介をさせてもらうからなんです。そういうことはさておきまして、資料1の「安中新田会所屋敷“旧植田家住宅”復元整備基本構想」を使いながら経過と今後の整備ということについて、若干説明をさせていただきたいと思えます。

一昨年の秋ごろ、資料1に書いておりますように、土地約450坪と建物、今日午前中地元の方に見ていただいた主屋・土蔵2棟などの建物、それらに加えて、先程来河内木綿の話とか書籍の話がございましたけれども、所蔵資料も一括して、植田さんから市へご寄付をいただきました。

まず古文書の方なんですけど、安中新田関係と植田家固有の文書あわせて約25,000点の解析については、現在関西大学の方で随時やっただいてますけれども、おそらく10年以上はかかると考えています。今は特に安中新田関係の文書を中心に調査をしていただいているところでございます。

その中で、今日は皆さま方にお見せできなかったんですが、宝永元(1704)年の大和川付け替え後の約7年後、正徳元(1711)年の安中新田の絵図が見つかっています。この絵図は縦が1.5m、横が6mぐらいあります。私どもの八尾市立歴史民俗資料館の小谷利明学芸員が、新田の地図としておそらく近畿で最大であろうと申しておりました。この絵図には新田の区割りや小字など

いろいろ書いてございます。

この絵図により、安中新田は、鴻池新田や八尾の山本新田など個人の大きな家の方が開発した新田とは異なって、大和川の付け替えのとき、植松村の庄屋であった中務家、林家、辻田家などが持っておられた古田と、慈願寺や久宝寺、安福寺が開発した新田と合わせてできた複合新田であることがわかりました。

ほかに書画、掛軸、扁額、屏風などについては、例えば、みなさんよくご存知で歴史に名を残した人物のものでは、勝海舟の軸であるとか、富岡鉄斎の扁額などがございます。点数は約2,800点でございます。それから陶磁器類については、伊万里焼・瀬戸焼等、2,100点ほどございます。河内木綿は、会場に展示している以外にもいろいろございまして、およそ200点あります。

また、茶釜や茶せんなどのお茶道具も250点ほどございます。既に明治期から大正期の間に、家の中に茶室をつくっておられたことが今回の建物調査で確認されています。現在の茶室構えや違い棚外に、以前の炉がきられていた痕跡が見つかりました。市太郎さんか一郎さんの時代に、学問や商いなどでいろいろな人たちとの交流があり、ここでお茶を嗜んでおられたのかなと考えています。その他、昔のランプや長持、漆器などの民具類が約1,500点、合計30,000点ぐらいの資料を頂戴しております。

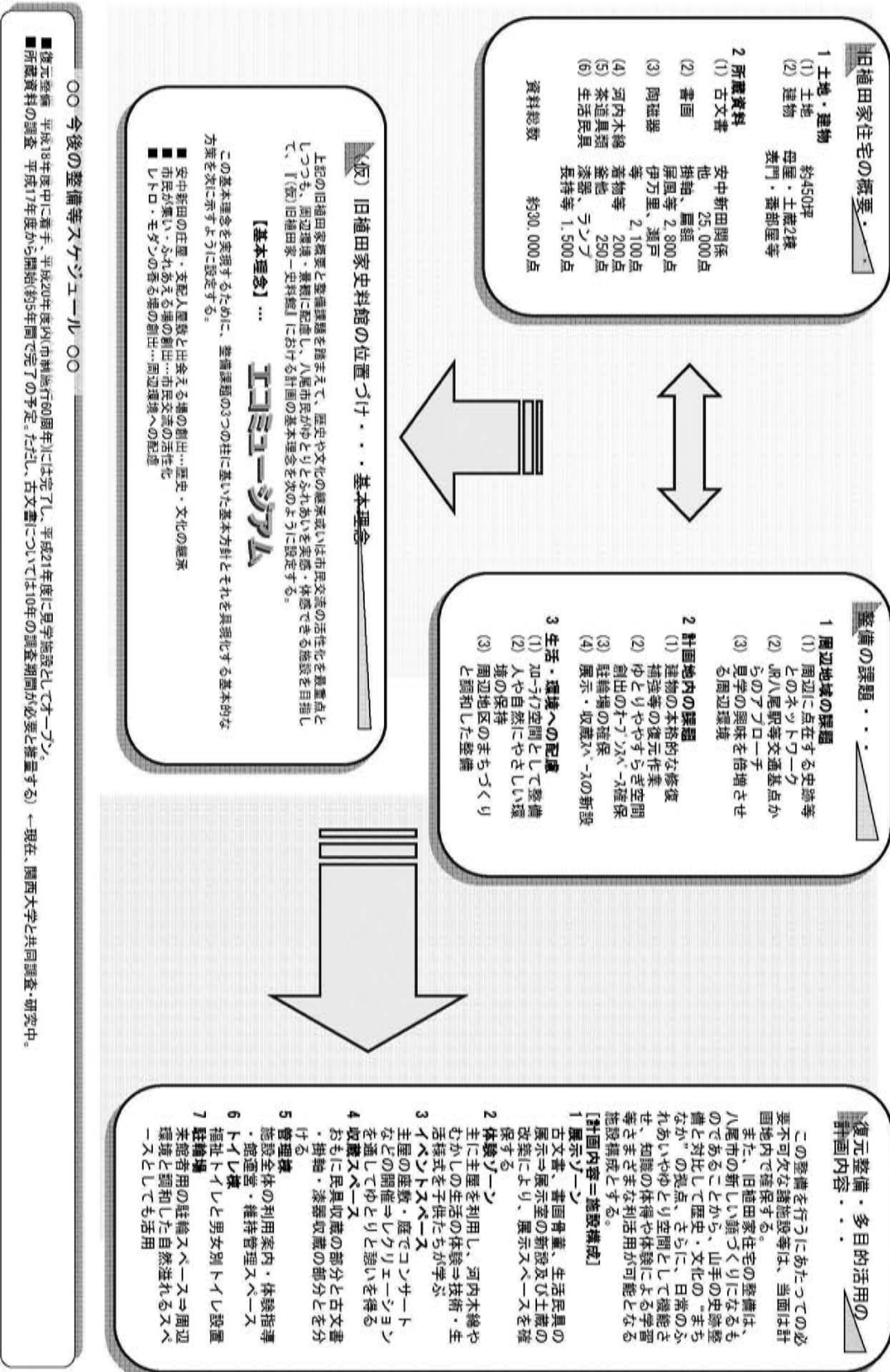
そこで、私ども市といたしましてご寄附いただく時点で、やはり、このように貴重な文化財を如何に歴史資産として活用するのかという命題も同時にいただいたものと考え、自分がこのようなすばらしい事業を担当させていただくという嬉しさの反面、成功させなければならないという不安が頭をよぎりました。

でも、私は普段からどんなことでも好きになって、自分のやれるだけのことを精一杯やれば結果はついてくるものだと考える、世に言う“幸せなやつ”でございますが、期待感にある程度の蓋をし、冷静になって考え、今、みなさんご覧いただいている基本構想のように、まず、課題はなんだろうかと抽出し、その上で、整備後の活用に係るコンセプトづくりを行いました。

手始めに、整備の課題として、周辺地域、計画

資料 1

安中新田会所屋敷 “旧植田家住宅” 復元整備基本構想… 『(仮) 旧植田家-史料館』



〇〇 今後の整備等スケジュール 〇〇

■ 復元整備 平成18年度中に着手、平成20年度内(市制施行60周年)には完了し、平成21年度に見学施設としてオープン。  
 ■ 所蔵資料の調査 平成17年度から開始(約5年間)で完了の予定。ただし、古文書については10年の調査期間が必要と推量する) ←現在、関西大学と共同調査・研究中。

地内、生活・環境の大きく3点を抽出し、「周辺とのネットワークやアプローチ」、そして、「ゆとりやすらぎ空間の創出」、「人にやさしい」等々の命題をどう位置づけていこうかと考えてみました。その結果導き出されたのが、その下段に書いてあります基本理念でございました。

私どもは、整備後の旧植田家住宅の位置づけとして、「歴史や文化の継承」、「市民交流の活性化」を最重点としつつも、やはり、課題の中にもありますように、「周辺環境・景観に配慮」した、市民の方々が「ゆとりとふれあいを実感」できる施設にしよう決めました。

そして、それらのことを満足する施設づくりには、生活の記憶を持つ「家」の保存に加え、地域における人間の生活と環境を大事にすることが一番求められるものだと考え、基本のコンセプトを“エコミュージアム”とし、旧植田家住宅を整備することにしました。



そのようにして構想が出来上がり、いざ植田家住宅の整備後の具体的な活用をどのようにしていこう、子供さんから大人の方までオールエイジングが楽しめる施設とはどのようなものなんだろうと、ない知恵を絞ってみました。

加えて、通常は所蔵資料まで頂戴しないことがほとんどなのですが、植田さんの場合は、貴重な資料類も全部いただくことができました。そこで昨年4月、単に文化財として家だけを見せるだけではもったいないので、植田家の屋敷地の東側にある土蔵と同じような形で、土蔵風の収蔵庫兼展示室を建てて、そこへ書画などの貴重な資料を保管・展示しようかというふうに考えてみました。

このようなことを言うと全部市で、もっと独りよがりの考え方をすると、私がやったというようなことになりすけれども、構想や活用方策を創

り上げるにあたっては、植田さんをはじめ建築家の方、デザイナー、音楽家と多くの市民の方、そして、旧知の大学の先生などのお知恵を拝借した結果として、このようなすばらしいものができあがったんです。だから、私個人としては整備後の運営も市民と協働で取り組めればと熱望しています。

さて、話は少しそれますが、先ほど正徳元年の絵図のお話をさせていただきました。当初植田家の屋敷をいただいた時は、江戸時代の庄屋屋敷であると認識していたんですけども、絵図では現在の植田家の位置に会所屋敷と書いてございます。植田家が当地に来られたのはこれより50年より後のことなのですが、大和川が付け替えられた早い段階で、既に新田の会所屋敷だったということがわかりました。

大阪府下で現存している会所屋敷は、東大阪市の鴻池新田会所、それから大阪市の加賀屋新田会所と、大東市の平野屋新田会所の3ヶ所しかございません。八尾についても、会所があったと考えられるのは柏村新田と山本新田なのですが、いずれも現存しておりません。その中で唯一現存していることから安中新田の会所屋敷跡として、平成18年6月19日付けで旧植田家住宅の所在する土地を市史跡に指定しました。

また、絵図とともに発見された当時の家相図から、安中新田の会所屋敷の一部が現在の旧植田家住宅に継承されていることが確認できましたので、同時に主屋、土蔵2棟、正門、控舎等を市指定文化財といたしました。

地元で貴重な文化財が見つかったということで、私どもも非常に喜んでおりました、以降いろいろと活用をしていこうと考えています。それでは資料2の「江戸時代安中新田会所屋敷“旧植田家住宅”の活用」をご覧ください。

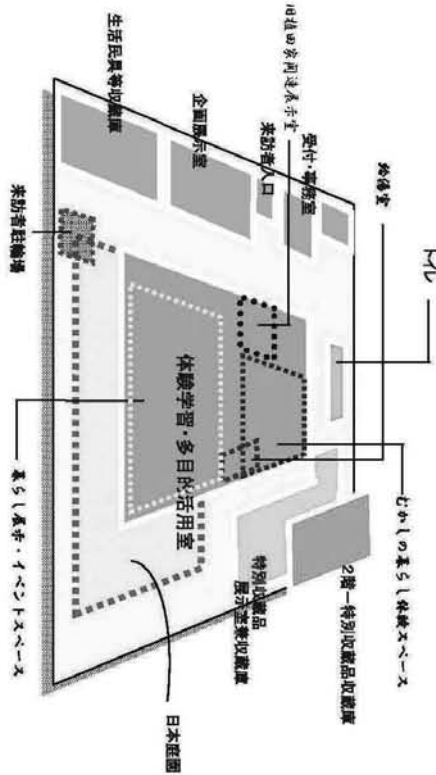
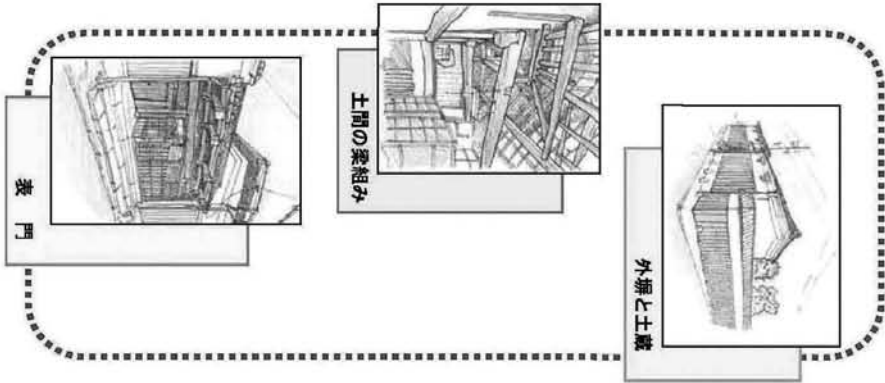
さて、植田家の土蔵の一部や主屋土間の梁組みは大変古いものであります。近畿大学の櫻井敏雄先生の調査では江戸時代後期以前のものだろうと確認されています。一方、居間や座敷まわりは新しくございます。江戸末の家相図で既に建築されていたことは確認されていますが、その後、明治・大正と大規模な改修が行われており、現在のものは昭和になってからの様式でございます。こ

資料 2

江戸時代安中新田会所屋敷“旧植田家住宅”の活用

旧植田家住宅の整備後の活用については、エコロジープログラムの機能を果たせることとし、“歴史・文化に扮れる”、“文化に親しむ”、“生涯学習”、“地域内外の交流”を図ることを主眼として、以下の活用役割を持たせるものとする。

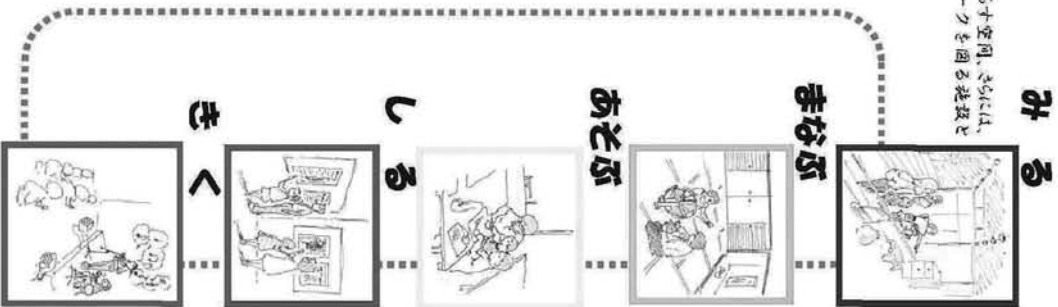
また、多目的な活用が可能を前提として整備し、市民に憩いをもたらし空間、さらには、安中新田に伝わる歴史的史実の発見、周辺環境とのネットワークを図る役割として整備する。



各施設ごとの利用計画

- 1 主屋
  - ①むかしの暮らし体験スペース
  - ②暮らし展示・イベントスペース
  - ③旧植田家関連展示室
  - ④給湯室
  - ⑤企画展示室(主に生活民具)
  - ⑥生活民具等収蔵庫
  - ⑦来訪者入口
  - ⑧受付・事務室
  - ⑨日本庭園
  - 7 新設施設
    - ①特別収蔵品展示室兼収蔵庫
    - ②トイレ(男性・女性・身障者用)
    - ③来訪者駐輪場

河内本郷やむかしの生活の体験を通じて歴史・文化に親れ合う「コンパクトヤマト」等の多目的利用など文化活動を行う  
 安中新田支配人旧植田家関連文書などの展示で往時の歴史を学習する  
 多目的活用のため給湯を可能とする(見学者向けの喫茶活用はしない)  
 江戸~昭和にかけて使われていた生活民具を展示し、なつかしい時代を知る  
 漆器、長持、ラブリ等の一般収蔵物を納める  
 江戸会所屋敷のたすまいを感じるエントランス  
 施設全体の利用案内、体験指導、受付等を兼ねた事務スペース  
 歩けるスペースとして整備し、安らぎの空間を創出  
 書画や陶磁器、古文書等の貴重な資料を展示・収蔵する  
 主屋や新設の展示室に近い部分で設置  
 周辺道路状況と併せて主要な交通手段である自転車駐輪スペース



れらをどのように改修しようかといろいろ考えまして、幕末までのものである会所と昭和の居間・座敷の接点となるのが明治から大正の時代であるので、改修の時代設定を明治～大正期にしようかと考えています。

先ほど藪田先生の方から「芋たこなんきん」の話が出てきましたので、ちょっと私的な話ですけども、「芋たこなんきん」の舞台である長屋に私の嫁の母が今も住んでおります。NHKが来たときやはりと思ったのは、セットで使う空き家を2、3日で昭和の住宅様式にされたんです。良き時代のノスタルジーに浸れる空間が再現された訳ですよ。

そんなことも影響しているのか、修復後の旧植田家住宅をご覧いただく際は、やはり皆さん方に懐かしい時代を知っていただけるような、歴史が未来へと伝え継がれるような復元整備をしようかと思っております。

それで実際の活用なんですけど、ただ単に文化財として見ていただくということではなく、「みる」「まなぶ」「あそぶ」「しる」「きく」と、いろんな使い方をしようと考えています。一つは、旧植田家住宅会所屋敷の継承建物や書画等の美術工芸品を見ていただくこと、もう一つは、体験学習です。

八尾市の市民憲章にも載っていますが、文化財を大切にしましょうということで、子どもさんたちに、もし可能であれば、復元した釜屋でごはんを炊いていただくとか、庭の草刈りでもしていただくとか、汗をかきながらいろんなことをしていただくなど、当時の生活体験をしていただきます。あるいは大人の方も含めて、現在八尾市立歴史民俗資料館でやっている河内木綿の体験講座のような形式で、資料館の方と連携して、講座を行いたいとも思っております。

先ほど高橋センター長の方から「女性が来れば男も一緒について来るやろう」というふうな話がございましたけれども、見取り図に新しい特別収蔵庫兼展示室というのがございます。ここには植田家に残る貴重な資料、古文書、書画、陶磁器類、河内木綿といったものを、ある程度期間を限りながら、展示替えをしたいと思っております。そういう形で女性の方にも満足いただけるようにしようと思っております。



これは私個人の考えですが、例えばクラシックのタバココンサートであるとか、落語会であるとか、そういうのができればと思っています。またここは当然ながら市の施設ですけども、そこに見学に来られた方がゆっくりしていただきたいと考えています。お茶やお弁当を召し上がりながらゆっくりしていただいて、贅沢な気分が味わえる空間にしていきたい、そういう思いで、今後活用を考えていこうかと思っております。

そういう夢物語がだんだんと現実化してきました、現在最終の実施設計、いわゆる復元整備のための設計をやってまして、この11月の中旬には結論が出ます。その後実際の工事に移るとのことなんですけど、役所の事業ですから、いろいろとすべき項目がございまして、整備が始まるのは来年の7月ぐらいからになると思います。主屋・土蔵等については、明治から大正時代の想定で復元修理をいたします。収蔵品については、民具類は土蔵1を改築した展示室に展示し、また、温湿度管理が必要とされる貴重なものは土蔵風の収蔵庫兼展示室を建てまして、そこで展示いたします。

私共八尾市の市制60周年が再来年でございます。旧植田家の整備事業が市制60周年記念の目玉にできたことで、すんなり予算がついたという経緯がございます。今日残念ながら、河内木綿や書籍のごく一部しか見ていただけませんでした。その他膨大で貴重な収蔵品につきましては、平成21年春のオープン以降に、修復された新田会所屋敷とともに皆様方にご覧いただくと考えていますので、それまで期待してお待ちいただきます。私の話を終わらせていただきます。

**\* 会場の風景 \***



センターの門幕（左）と幟（右）が初登場



センターの活動の紹介



講演会の様子（左）李熙連伊氏（右）藪田貴研究員

## 編集後記

「関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター Occasional Paper」No.5をお届けいたします。No.5は、2006年10月14日に、八尾市教育委員会との共催で、植田家および龍華コミュニティセンターでおこないました、地域連携企画第2弾の講演記録を編集したものです。

森 隆男研究員は、植田家住宅から垣間見ることができる新田会所屋敷としての性格と、植田家の人びとが営んでいたであろう日常の暮らしぶりについて説明しました。参加いただいた皆さまに植田家への訪問客のつもりで説明を聞いていただいたことで、植田家住宅の特徴を体で感じていただけたことでしょう。

李 熙連伊氏は、会場内に展示された河内木綿の幟や風呂敷、消防法被を手にしなから、植田家に伝わった河内木綿についてお話しく下さいました。会場を縦断するくらい長く、絵柄が鮮やかな節句幟に声が上がったり、来場された方がたとの間で意見交換がされる場面もあるなど、会場は終始活気に包まれていました。

藪田 貫研究員は、植田家に残された書籍を手し、植田家の人びとの学芸環境について説明しました。懐徳堂だけでなく、<sup>せきてん</sup> 釈奠や舞楽の復興の動きが見られる資料、「懐徳堂祭典執行次第」が出てきたことは、当センターの今後の活動に力を与えてくれているように感じました。

八尾市文化財課の岸本 邦雄氏は、旧植田家住宅の復元計画について説明くださいました。「(仮称)旧植田家史料館」として復元整備し、資料の展示や体験学習、クラシックコンサートやギャラリーなどの催しについての構想をお話しく下さいました。

当日、参加くださった方がたが講演に熱心に耳を傾けていたり、節句幟を見入っている様子を目にしました。調査にかかわっている者の一人として、調査の成果を八尾市民の皆さまに還元していかなければならないと決意を新たにしました。

今回の地域連携企画第2弾においては、2005年8月以降、当センターがおこなってきた調査の成果を報告いたしました。調査には多くの方がたにご協力いただきました。この場をおかりして、御礼申し上げます。

(編集担当 松本 望)



---

Kansai University Research Center for

**Naniwa-Osaka Cultural Heritage Studies Occasional Paper No. 5**

地域連携企画第2弾 八尾安中新田植田家の文化遺産

発行日 2007年7月31日

編集・発行 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 関西大学博物館内

TEL 06(6368)0095 FAX 06(6368)0092

<http://www.kansai-u.ac.jp/museum/naniwa/home.htm>

E-mail [naniwa@jm.kansai-u.ac.jp](mailto:naniwa@jm.kansai-u.ac.jp)

印刷所 (株) 廣濟堂

---